夕の水

はきて　并二

哥と詞を名とする

[v. 4]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 4
copy 1
Asian
Japan
case

2004551302

9

源氏十六戈

六条わたりの御遊びにつりきの御うちよりまうぞ
給なりやどりは大武のめのとのいたくはづらひる
何もまゝ成はけうとつゝりんとて五条にたりなる
家は尋ておりたりし御車いるべき門はさしたり
かれば人をして惟光めさせてまゝせ給ける程むち
しげるかほちのさまゝ成こわるしまへるまゝ此家
のるはしまひがきといふ物あるしうして
かきはたしどと半蔀四又けん斗あげわたして すゞれ
などもいとしろうすゞしげるまゝおりしきひたい
つきのすきかげあまるこゝしてのぞくだちさ海
よふんしもつるしやるまゝあるがちまゝけしうき

心ちぞすゝいかるもおもつどへなからんとやう
がくりておぼさるれ車もいくうやゆしきまへ里
されもとくせ給ふず誰(それ)とうしらんとうちとけの
てすゝしさしのぞきまへれば心どハ志とこれやう
なるをなし何ぞしらこられの程なくものくれ
きすまゐを衣(あれ)はいづこかさしてとおもほしなせば
玉のうてなもおれじとなりさうけぐろ也
いとあをやかるかづらのしらちよげまくひかれ
なるしろき茎(くな)ぞとのれひとりゑこれまゐひら
けるか

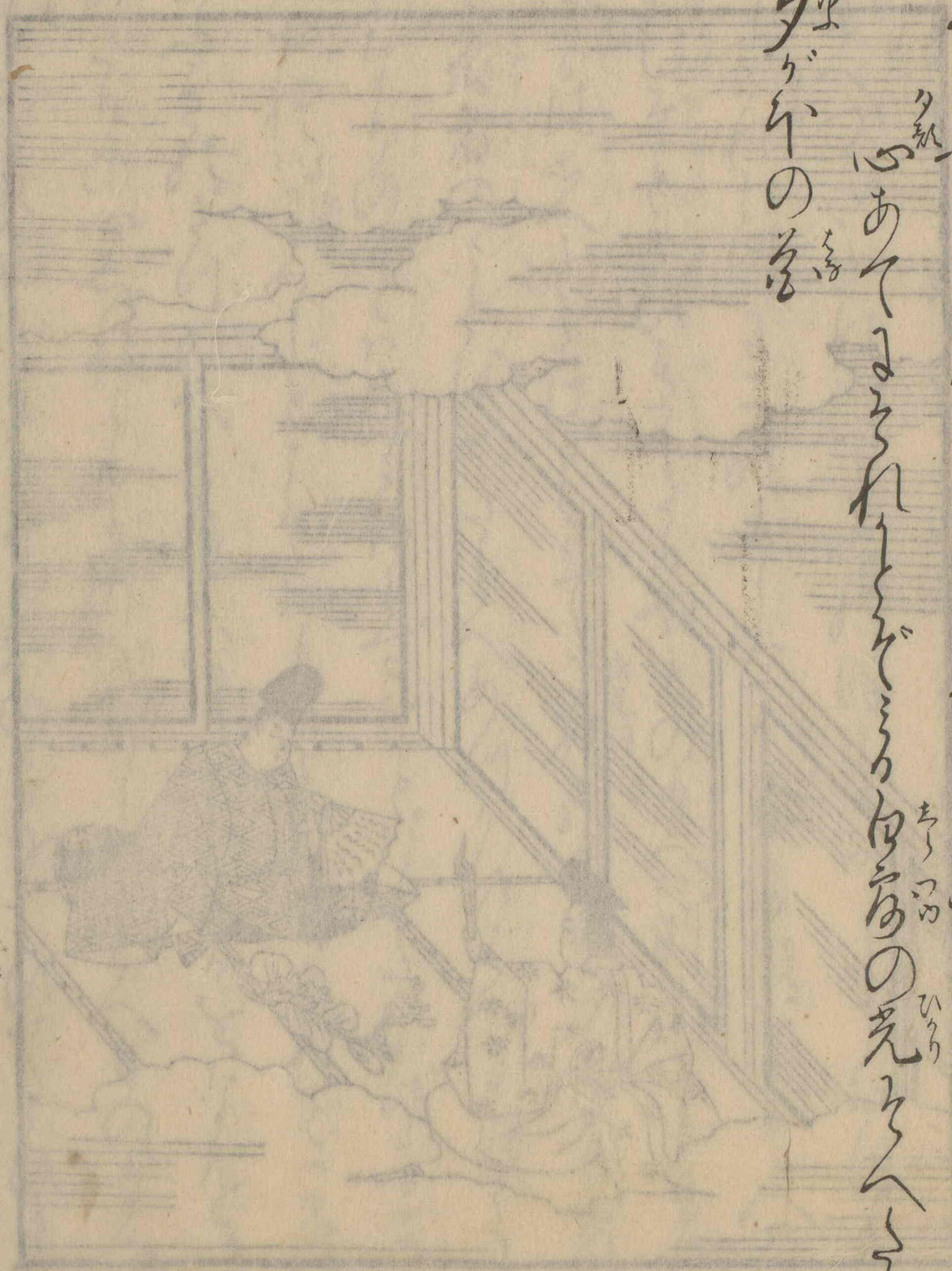
ぞちこちらべまゐとひとりごちしまふを。流
隨身（ずいじん）ついゐてかれしろくさける波なんりがかと
ゝ待る。菫（すみ）の名（な）ハひとめきそかうあやしきかさね
まなんさ紀伝けるとゝ。げ（源心）ないと小家（いへ）がちま。むけ
りしげるわたりの。これ（此面）もの（枝面）もあやしうおもふ
ぼひてむらくしりぬのきれつまごとまちひまろ
ちれるを。口おし（ぐち 源詞）の花（すみ）のちぎりや。ひとふきおりて
まいれとの給へば。この（隨身）をしあけしる門（ぐ）に入てゐる。
さすがまざれしるやはと戸口（ぐち）にさゝるすくしのひ
とへぐりま。ながくしきるししるわたくのおりしげ
なる出（ぞ）きそぐちまゐくしろき扇（あふぎ）のいてうとがし

たるをこれはをきてまいらせよ。枝(えだ)もなきけるげ
なめる菓をとてさしせられバ。かどあそて。惟光(これみつ)の
朝(あさん)トのいでさうしてしてまつ寸(惟光詞)がぎをとる
まどくし侍ていとゆびんなるわざなりや。もれく
あやめこのへわくべき人も侍ぬわたりなれぞ。
らうがはしき大路(おほち)にたちおりしまいてとかしこ
まりゆ。ひきいれており給。これこれがあはれ阿闍梨(あざり)。
むこれこうハのうこむすめなどわたりつどひしる程
にてうくおりしましける悦(よろこび)をまたなきことよりし
こまる。何(大夫乳母)まゑ(ざこ)もおきあがりて。おしげるきまなれ(乳母詞)
ども。捨(すて)がたくしたまへつることは。しぐかくおまへに

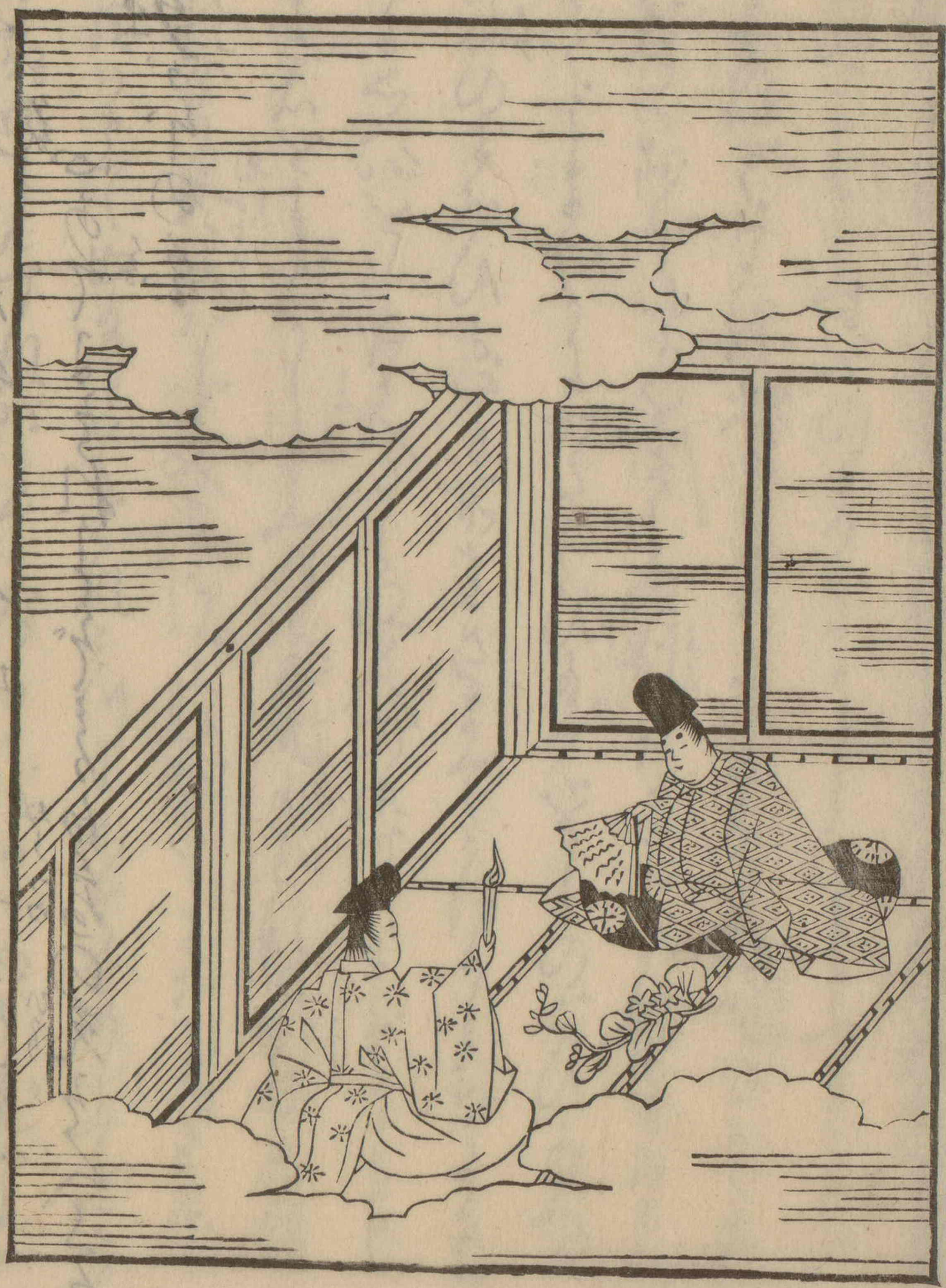
さふひ御らんぜしることのかたり侍りなん
ことは後ぐらおしう思ふまへる由ふひしかどいむ
ことれしるしはよみがへりてなんかくわたりおは
しますをこ給(まひたぶり)ぬれば(いま)となんあるぞ佛(おとけ)のれひか
ともぶぎらくまゐれ侍べきなどきこしてよは
げまなく日(源氏)ごろをたりがたくものをらくをや
すらずなげきわたりつるまかく世(よ)をもるるくさ海
まもれしのへいと兎(あれ)まくちおしうなんいのち
ながくて稚(をとゝの)位(くゐ)なくなどもこゝるしのへざてこそこそ
の(はの)しれのかみまもさたりなくむまれ給ものは
世はすうしこのろかはわろきわざとなんとて

なと聞えての心地はあるとゝまれともやうの
さふらふ人は。あさましうあはれなる事とも。し
ていとおほつかなさにひつゝまりけん君も
いとゝしうかうしけるをおほゆへかめれとすゝろ
またなるゝうちたなり。こともはいとゝつらしうと思
てふむとさめの世のさりかたきやうにはなけれとうら
ひそかにれんそうれおとつきらしらひめくりけり。
よみにけと哀（あはれ）とおほしてなつけたりけるにはよ
さるへき人のうちすてまれしのひはけるか
さりとくむ人あまたあるやうなりしかとも
うしくやまひむらふうすちてあるなくなんおも

ほしひとなりて後(のち)ながぎりあれば朝夕(あさゆふ)なし
もえこ生(そまつ)ず心のまゝまとふしひまうづることは
なれどなほ久(ひさ)しうしいめんをぬ時(とき)はこゝろ
ぼそくおぼゆるをさしぬ別(はれ)はなくもがれとなん
などこまやかなかたひのそこのごひのへる
此袖(そで)のまゝひもいと所をきまぐりほりこちたる
げにしへばとしなべたしぬ人の此すくをぞうしと
何まぞをもどうしとみつつ子(ども)もこれうち此ほ
これなり修法(ずかう)などこそこちじむべきことなどとさて
の給はせて出のとてこれこれは此そくめしてゆり
つゝ扇(ぎ)はらんずればとてなしこうつり番(が)こと



しきしゆうなりしうておりしうすさひかさなり
心あてまそれなとぞこゝろ白家の光そへらる
夕が年の菫



（源心）そこはとなくかさまぎらはしかも。あてはな
まゆへづさこれば。いとせれほかまおかしうおぼえ
ぬふ。（源詞）これこれはこれはしなる家（いへ）にはなるべ乃
まむぞとさひきてこりやとのまへば。例（まこ）（惟光心）のうるさき
（三）はしこ心とはせへど。さはやさで。（惟光詞）これ又六日こうまくべれ
ど。病者（とうざ）のことはせこまへあはりひたべるほどま
となりのことはえ（こさく）ぞ侍ずなど。けしうなげまき
こゆ積ば。（源詞）まくしとこそおもひこれ分。されどこれ
あふぎれ。こげめべきほへ。なりてこゆりを。なんをせ
あらりの心しれらんものぞ。めしてとへとのまへば
（惟光）いりてこのやどもりなるおのこをよびてとひ。さく

惟光詞　三ケの一

やうめいのせけなる人の家になん侍りける。おとこ
しゐ中にまゐりて。めなんわくことこのこそ。し
らしなど家づゝへべまそ。きうよふと申給へし
しさことは。しもびとのえしり侍らぬまやあらんと
こさゐ。さしは（源詞）その家づゝへべなるは。しらうがは
抱なれていへるかと。先ざ海しうるべききは
やあらんとおぼせど。さして（地）罪（きこ）なれうこゝろ乃。
まくうずせぐしがるれぞ。是いのこれかるは
おもしめ（れこ）心なめかし。れたうがみは。いこうあ
らぬさ海まうさうへなそ
（源）よりてこそせられしともこ先こそそれは国の

ぼのこつられの夕がか。ありつる(三)は(ざいどん)男し寄
つらす。(地)まぶこゝぬ(は)さ海なりそれど。いとしるく思
あてられまへる。はそばめ(は)こすぐさで。さしおどろ
りしけるを。はいへもなく行へそれぞ。なまらしる
なさまかくわざとめりしそれが。あまえていかるる
こゝんなどいひしろうべかめれど。(語力心)絶ざ海しと
しひて。語力はまいりぬ。(三)はさきれまほかのうまて。
いと(ほ)しのびて出まふ。ぐしとみはおろしてなぞり。
ひまぐくよりこゆる火のひかり。はらうよりける目
のうま(あれ)衣なり。(三)は心ざし(は息不)の所まはこぐちきんざい
などなべての所まにぞ。いとのどうまころまて

すこなしのへり。うちとけぬ(源心)は有(三)程(ありさま)などの。かし
きことなりまゝ。ありつかり(タガヤニ)されおもほし出らるべき
あらずかし。(源)はとめてすてしねすぐしのすて。日さし
出る程にいでこまふ。あさけのはすぐるそげに人の
めでこさてこんも。ことかりなるはさ海女なり。かふも
これ志とこれまへわたりし給。さしかるもすさ給
けんわたりなれど。こゝぐかるき一ふしは(三)はこゝろ
とまりて。いかるか人のすこかなしんとは。ゆかさくに
はめとまり給なり。惟(元三)光日ごろありてまいれり。
わづらひ(惟光詞)給ふ人なにはとはげに給れば。とくこのひ
あけかひてなんなど。実てぢくまつりよりて。寄ゆ。

ちほきれし役(のち)なんどなりのことしりて作もの。
よびてともせ作しかど。くらぐしくも戸作しば。
いと志のびてさつ(お月)されよろほひよりものし治人
なんあるべかれどそれ人といさゝる家のうちの
人まぐまきれずとなん戸。ぬぎ中垣(がき)のかいまうし
作るまげまわりさぬどものすさかげえし作。志びら
ぐろもれがしくぐりひさかけてかしづく人作な
めり。嵯(さのふ)日夕日のこりなくさし入て作しけり。
ふとうくとてゐて作し人のかほしていとよく
作しが抱志へるけちひ志てあり人ども志のびて
うちなくさ夜ぞとなん。志るくえし作りとさゝる程。

源 まんうらゑこまひて。ちゞぶやとおもはしさう。おぼ 地惟光ハ
えこそおもふべきされどのぼたれどれよりさひの
頼人のなびきめぞかしふる殿などぞ上ふまハすさき
給ハざらんもなさけなくぞうじくしうべくらし。
人のうけひかぬほどにてぞなまだなるはさりぬべき
あたりのこゝにハごみのましうおぼゆるものをと思
とりゞ 惟光詞 もしるのへうつこともや侍らなど。ぞいさき
つめでつくり出てをそこなどつけさうさ。
かきなれさる手てにてぞ。くちとくかすなぐし 侍
こさい。くちおしうハあらめわびんへどもなん侍らめると
きこゆ。精ハ。夫を源詞 猶そのひよれど。よづ〇ちてぞなきうくし

りなんとのたまふ。(添心)れしもがしもとおもひお
と志てすまゐなれど。それ中にも。ぞひのほうな
くちおしうしぬをこうけたんなとめづらしう
おもほさぬかり。さてうれ(うつせミ)蝉のあさ夜志うつれ
なさ。この世の人にはたがひておぼすよ。おいらう
なるましうば。心ぐるしきあやまちまでもやこぬ
べき。いとねたくまけてやこなんを。心よからぬ
おりなし。(地)うやうのなこくまでハおもほしうら
ざりつる。あり(あまよ)し夜夜のしかさぐめれ(のち)後。いぶ
うしくおもほしなる志れぐのあるよ。いとぐく
まるくなりぬるれ(ミ)こころなありうし。うしもるく

まち男(きこ)がほなりうつるの人を衣(あはれ)とおぼさぬ
ましもあらねどつれなくてきゝおくらんことの
ちげりしそれがまげこゝろのこゝろこゝろてくと
おぼせ程に伊与(いよ)のせけのわりぬまげいそぎまい
れりふかこちのしわざとてすこしくろゝやつれたる
猿(えび)すがるいとふつくりに心づきるしされど人をい
やしうあすぢよりうちなどもびこれどきたげ
まてふぐなるぞくしきりしづきてなどぞあり
けり國(くな)の和漢(ものがたり)などもゆげ(係心)ともいくつとといまほし
くおぼせどあひなくまばゆくて此(こ)こゝろの中(うち)に
おぼし出りとさしあぐなり和まめやうなる事

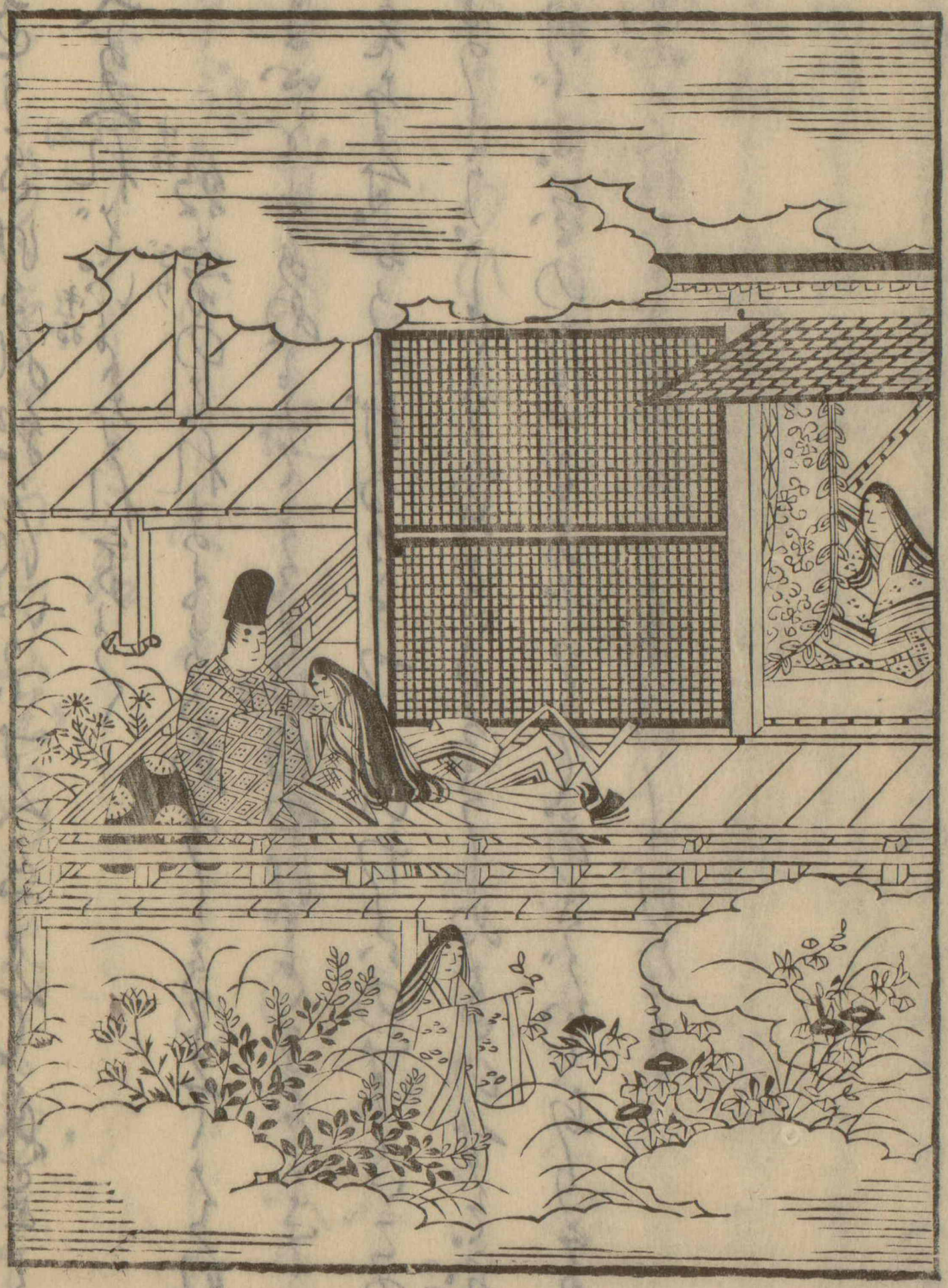
おとる後ゝく思もげまおこがましう。字もしろめこそ
わざなりや。げまこれぞなれめなるぬうこをなめる
と。むまのうこのいさめおぼし出て。いとおしきな。
つれ（重撰）なき心もしるこそれど。人のこめは衣（あれ）とおぼし
なさる。むすめ（彩蝶筋）をばさるべきひとまなづくて。小乃（さこ元様）
（さ）をばねてくぐりぬべしとさくまるまひとうこな
らぬ心あるしこしたるて。今（いま）一こびハえあるまじき
ことまやと。こぞこ後ゝこひまへど。人（とが）のこころを
あるせしこんことまてごまうろうまえしも
まぐれ給まじきに後まして。まげなきことまに思
て。いまさしまこぐましうるべしとしひとるれたり。

さすがなることにておもはしきすぢなんどもいと
いふかひなくうたてあるべきことはやめて。さるべきおり
くのたれいへなど。なにかしくさしてつたなげの
わづらひなつけたることの絵（え）。あやしううら
さげなめとまるべきつくらへなどして。哀と
おぼしめすべき人のけしきひなれぶつれあるくさき
ものしたすれば、ことなるおぼすゞ。いまひとつさゝめし
つかへなる花（とな）。すゞしげなるちとけめべくさしさ
なるを。このみてとくこそしまへど。けしきもう
ごさずぞありけつ。秋（あき）はもなすりめ。人やつとなくすゞ心
ばくしなおもはしきこぶることもなくありて。大殿まいら

こしまの垂（をき）つ。うらめしくのミ出ひきてしまへり。
六条わたりまもとけぐるかりし（ミけしき）は乳包を。おもむけ
（は息不）
きこしめて投（のち）ひきへしなれめるらんいとれ
しかしされどよそなりし此心まどひのやうは。
あかがちなることはなきもいかるることかと見て
（は息不心）
たり。ぬいしと把とあまりなるまでおぼし出見
たる此心ざ海まで。よくひの程もなげるく。人のもり
きんはいとぐくつきはよがれの。ねざめく
おぼし出ほるくこといとき海ぐなり。雪（きり）れいと
ゆるさなしこいくそぐのうきれのひて。（添）ふるげ
なる宇（けしき）夕はうちなげきつ出のを。中（ちうじやう）ねのおもと。

みかうし一月(ま)何ぞまてこゝろてまつりをくりのすへと
おぼしく。れき(ちやう)狂ひさやりこれば。れぐ(れ息宿)しもこゞまて
こゝ出しのへり。前(源せんざい)栽の色(いろく)こゝぐれこゝろを。色(すぎ)がてに
やすしひのへるさ夜。げにたぐひなしこゝろのうへ
おはするに。中将の君れともにまつる。志をん色(いろ)乃。
おりにあひこゝろうす物のもおぼやうにひさゆひ
こゝろこしつき。さいやうになまめきこゝろ。源こゝへり
しのて。すこのまれかうらんに。志げしひきすへ。
里(中将)うちとけしこゝろぬもてなし。うこのこゝろぐ。
めぐ夜しくもとこゝ給
源 ちゝ(と)学(な)にうつりてふ(な)ぬいつゝ。兎どもおうて

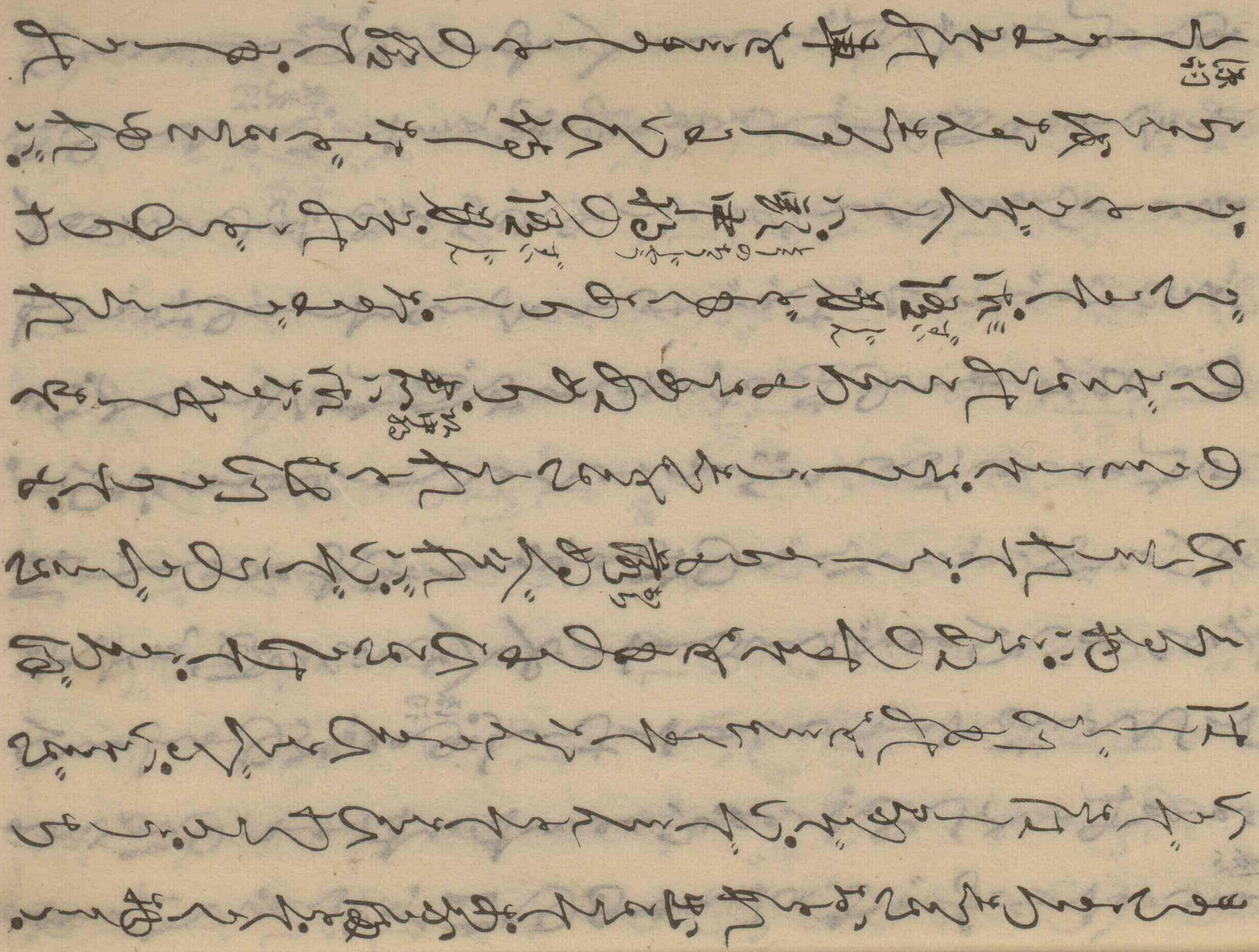
色(すぎ)うきけき此朝(あさ)がほ・いかゞすべきとて・身をとら
へ身入れぞ・いと(中ね)なれてるとく
朝(中ね)雰(ぎり)のそれまもまゝあれしきてそれ
ま心をとめぬとぞこゝろ・とお(地)ほやけどまぞきこ
えなす・おりしげるさふしひわふのすぐこの
ましうこしさしめきこゝろさしぬきのすそ・家(口ゆ)
けゞま・菜のなすまゞのでてあさぶかありてる
(まい)氣(おど)なれど・恵まゝまほしげなり



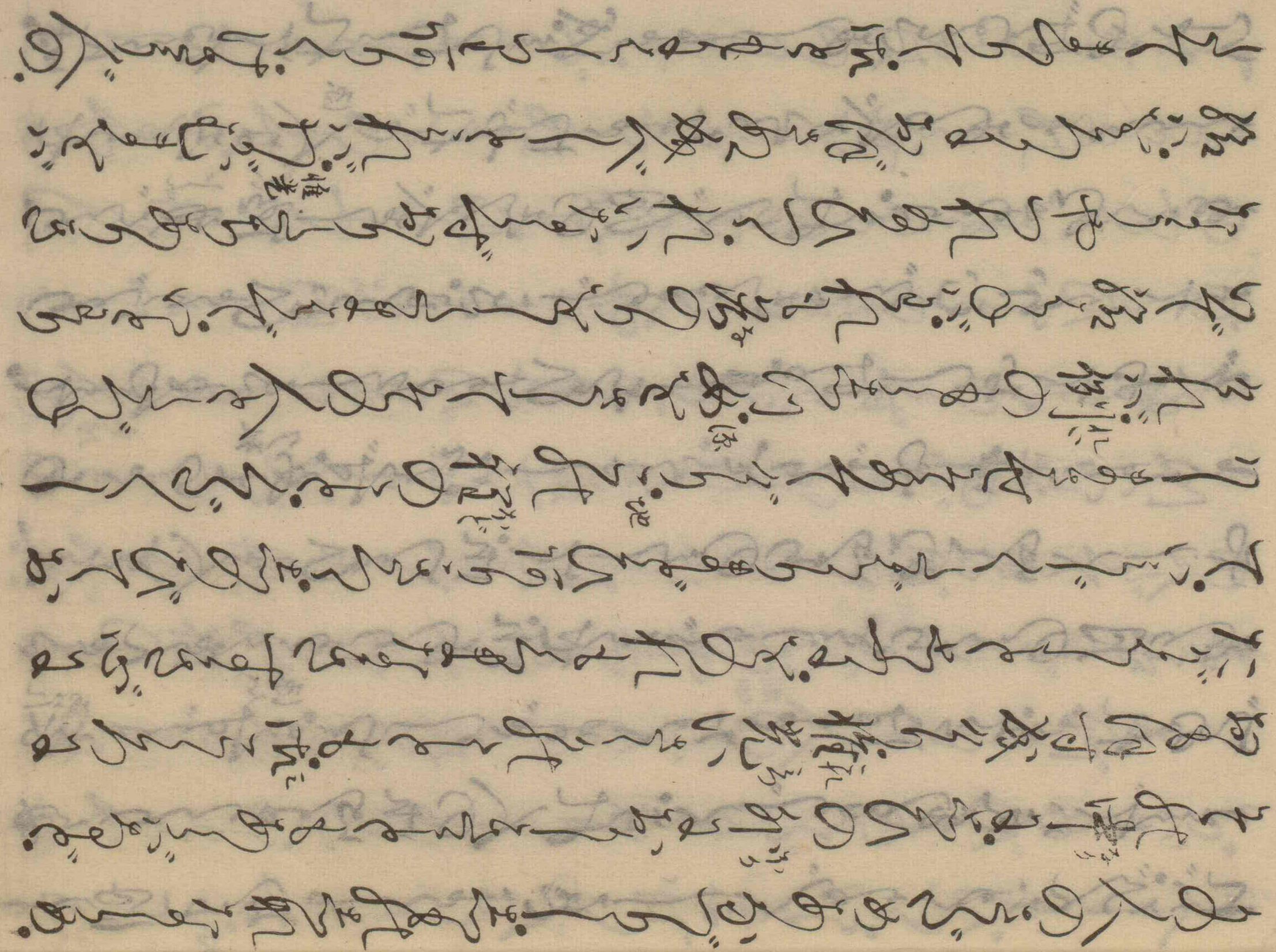
地源ノ祈ヲ云

おほかるまうちとなり人ごとにそろ志めなきぬ
ハるしものく情（なさけ）志るぬ山がほも蓋（えな）のかげにまなか
とやすらハまほしきまやこの花ひかりとこなり
ほかりハほどくまつけて わがかるしと志むさめ
とつうまつらせぞやと孫がひもしハうちおし
りしずと志いもうしとなどもたる人ハいやしき
までも稚らの花あるりまさゆるハをんと志ひから
ぬハなりかりまして さりぬべきつゐでの花
ことの紫もなつりしき花乳色をこそてまつる
人のすうしものく心を志ひ志るハいぐをろかり
志こそてんあけられうちとけてしもおもせぬ紙

心もとなきことはしべかめり。まことやかの雅光(元三)が。
あげかりのかいまみまゐ。いとよくあかいことりてや。
それ人(惟光内)とはさらにしたより侍らず。人にいこじくか
くれ恐(志の)ぶかりしきなんこと侍を。つれづくなる
まゝに。これこのたゞしとこあるなが(中屋長屋)やにわたりき
つ。車(くるま)の者(をと)されば。わきもれどものぞきなど
すべかめるに。この志うとおぼしきもたひわたる時
たべかめるかたちなんほのかなれど。いとらうたげ
に侍。一日(ひとひ)さきをひてわたる車のたべりしを。
のぞきて。わたるべのいそぎて。右(うこん)をの君(きミ)にそまづ
ものこのへ中将(ちうじやう)殿(どの)にて。光(元)よりわたり給ぬれといへば



あられまますれざりし人まやとおぼしよるもいと志らまほしげるれ氣色をこそ。惟光詞わさくしのけさうもいとよくしをきて。あるかいもなる前なくこゝあへをきなるべしこゞわがどちと志らをて。ものなどいふわきおもとの侍るをそらおぼれ志てなんいかられまかりなりくいとよくくしらりと志ひて。ちいさ紀こどもなどの侍るがことあやまりし侍べきもいひまぎらりして。又人なきさ海を志ねてつくり侍などくりてわらふ。源詞あまぎ君のとふらひまもれちんつゐでまかいまこせさせよとの給へり。源詞りまてもやどれりすまゐの程を志まこれこそ



いとおげるさあしもと紙こつけられて待らん時。
うらえもあるべきうなまとわぶれど。人(源)はしらせ
ぬまぬまくるゝれりが目のしるべきし語(ずい)男(じん)ぞり。
さてハかゝむがるまゝるまじこき。ほらハひとりがり
ぞおそおりしけるもしさひよりそしきもやとて。
となりは中やどりとぞまし給ふず。女(夕乱)もいとあ
やしく心ぬ心ちのうして。此つゝひは人をそへ。
あり月のうちをうぐはせ。此ありうゝきんとる
づぬれどそこはりとなくまどりして。さすがは(源ハ)衰(あハれ)
まこそハえあるまじくこれ人の此心はうりぬ
れバぢんなくうぐしきことくもおもほし

うへしまびつ。いとしばしくおりします。いとしたて
ぢはまめびとのこゝろおりもあるを。いとめやす
くしげめのそ。人のとがめこそ程べきゆるまひは
志給そざりつる代。あやしきまでけさ程ひるま
のへぞてもおぼつるくなど。思まづらそれしまへば。
何はいと把ぞるおしくさ海で心ともべきことの
さ海にもあらずと。いとじくさひさましのふ。人の
けもひいとあさましくやはらかにおほどきて。も
のゆく。ともきゆるはとくれて。ひるゆるわかび
しかもれかし。世をまぐしあぬにもあらず。いとやん
ごとなきにはあるまじ。いづくにいとかくしも

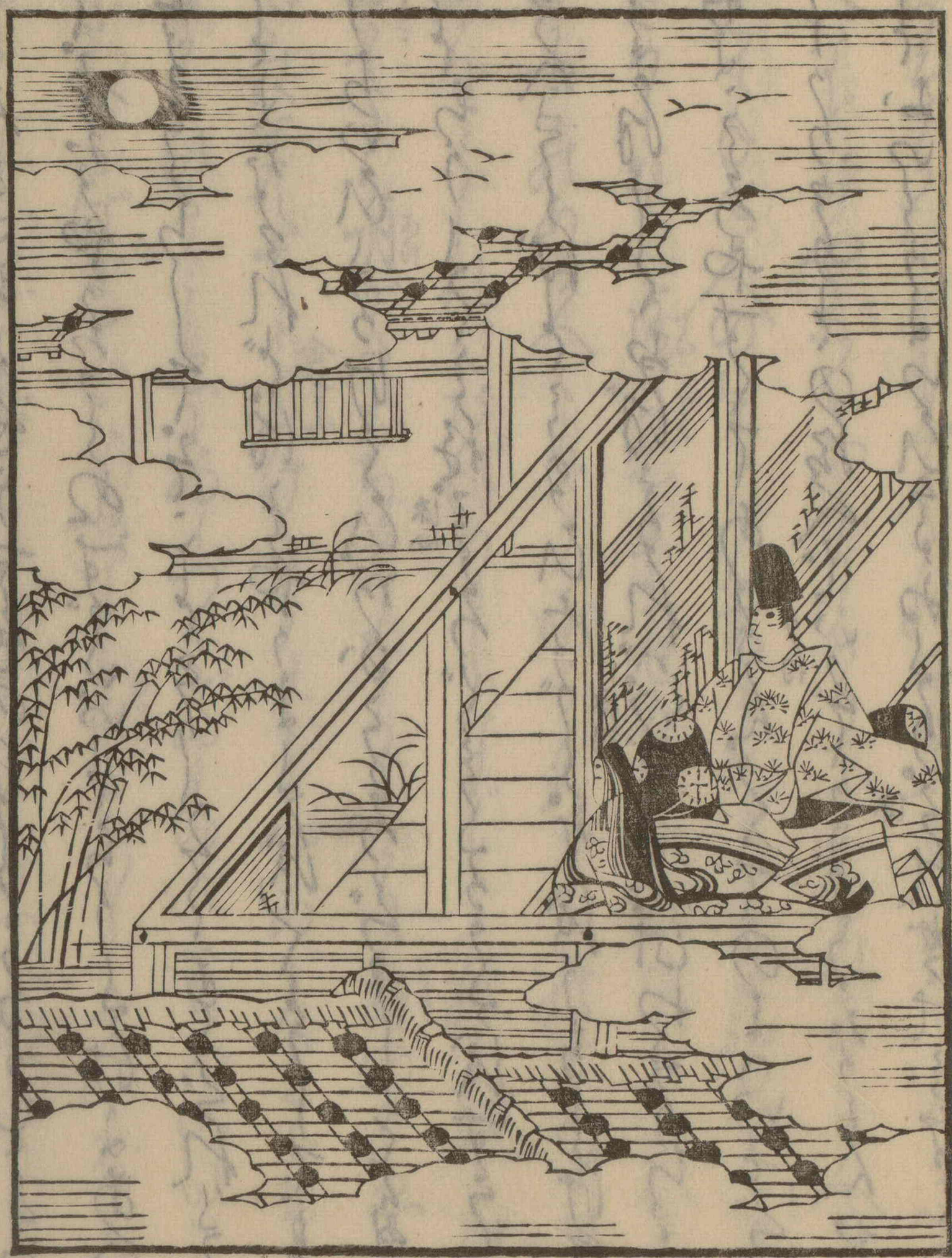
ともかく心ぞてと〱思ほす。いとしもさしめきそれ。
さうぞくどももやつれうつりのれぞならぬ海を
えかどもはのこせある便乗かくさ猶ま人を出
いめて出りなどしかまへし。覚(夕怨)ゆしありけん
ものゝおもひんなる思めてそうるそ。おもひなげかれど人
のけはひもひとつまさぐりにもさゝめきさわぎなれど。
惟(これ)ぞうりはあらん。程みすさものゝ出でつる
わざとありと。(惟光に)いふことうるひながら。もめでつれ
なく出すがはまそうけく。おもひよらぬさ海ぞ。
うるまずあざれありけりい。うとまとまろ
えざらく。おぼしもあやまちやうたがひそのかきさひと

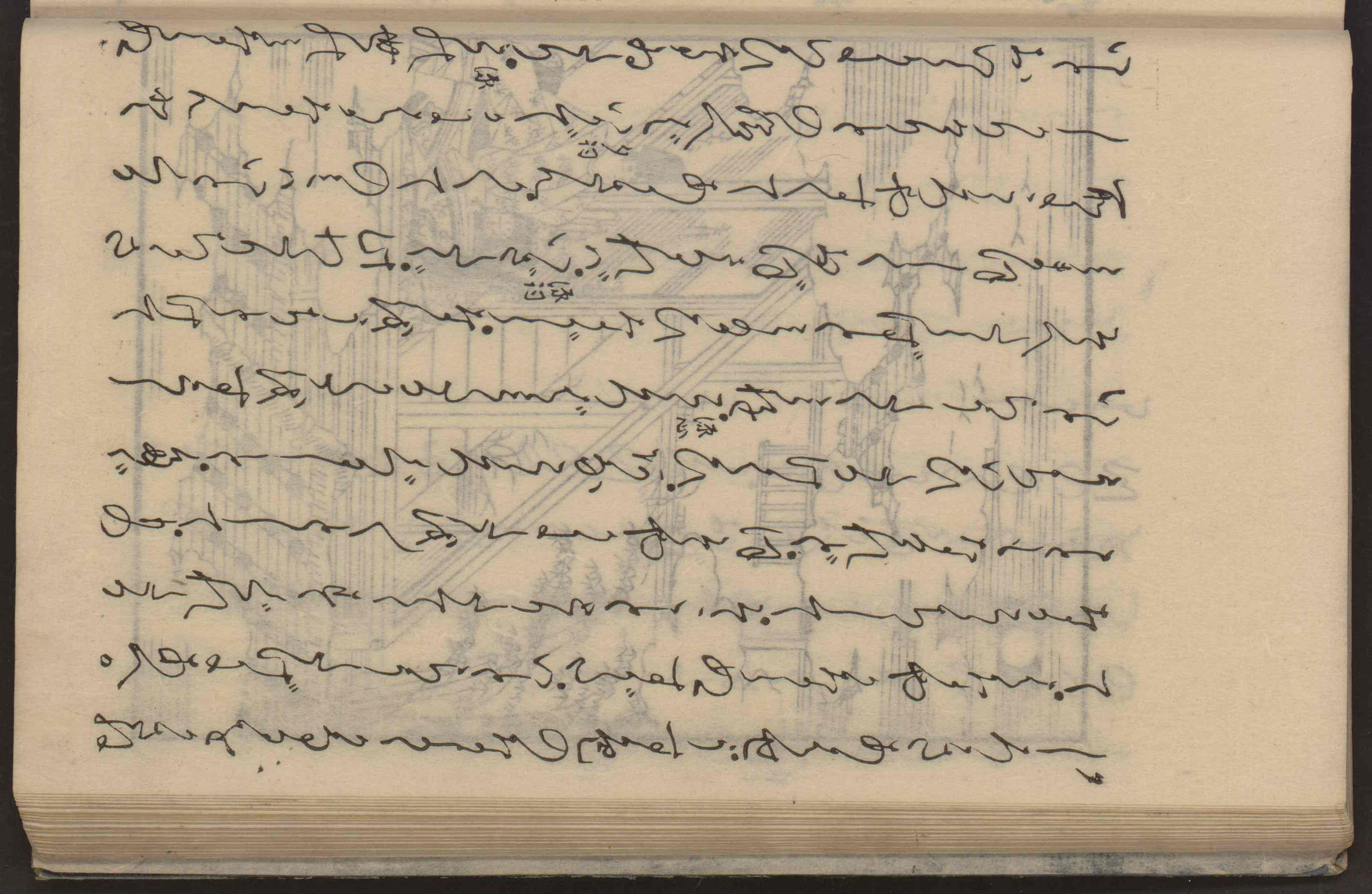
なんしける。君（添心）もかくうしるくしゆめていひかれ
なばいづこをつりとかわ連もしづのむ。かりそめれ
かれ家（ガ）ともしこ程めれば。いづくまもうひろひ
ゆかん回をいひともしらじとおぼすに。をひまどハ
してなのめに思なすしはべたは。こぐかぐらりの寸
さひまてもすぎぬべきことを。さらにさぞすづし
てんとおぼされぜ。ひとめ我おぼしへぞてをき給
まれくなどハいと志のびがたく。くるしきまでお
もほしこまんが。稚（なと）これとるくて。二条院（ごうのゐん）へむかへて
ん。もし罪（きこ）ありてびんなかるべきことなりと
も。さるべきにしそれ。我（ヨガ）こころなぐらいやかるし

人かしむことはなきをいかるる歎(ちぎ)りよりはありけん
などおもほしよりぞ(添詞)いと心やすき所にてのど
かにさてんなどうちひのへだ(夕敷詞)なりとあやしう
くののへどよづゐぬれもてなしなれば、もれお
そろしくこそあれと、いとまうびていへだ(添)げまと
ほゝ思まれのて、いづ(添詞)れかさつほなりんこだとうら
れのへりしとなりしげよののへだ、ぬ(夕)もいとじく
なびきて、さもありめべくせひしり(地添)せよなくうる
日なりんことなりともひろふるまゝ心ぞ、いと
衰(あられ)げなるひとくこゝもふまなをかれ(とうのちうげやう)郎中ゐのとこ
なつうるがはしくかしりし心ざ後まげ思出られ

かへど。悪(あの)ぶりやうこそことあかがちまもとひ出
給ひず。氣(け)安(しさ)ぐらして。ふとそむきくるべき心ぞ海
などはなかれば。かれぐまとぐしとよんおりこそは。
さやうにおもひかくることもあしめ。心ながらも
すてしうけろふことにくんこそ。養ちまるべかれと
さへおぼしかゝ。八月十五夜。くまるさ月がげ。ひま
お月かゝいるやおりなくもりきて。ごなるひかゝぬ
すまゐのさ海もめづらしきに。暁(あかつき)ちかくなるとすり
けりなるべし。とるりの家(いへく)こおやしきしぼのおの
聲(こゑぐ)こめさ海志てあられいとさむしや。ことし
こそなり(農)たりもひまものむ所すくなく。ゐなすれ

となる神(かみ)よりもおどろ〳〵しくふみとゞろかすからうすのをともまくらがみとおぼす。あなみゝかしかましとこれにぞおぼさるゝ。なにのひゞきともきゝいれたまはず。いとあやしうめざましきおとなひとのみきゝたまふ。くだ〳〵しきことのみおほかり。しろたへの衣(ころも)うつきぬたの音(をと)もかすかにこなたかなたきゝわたされ。空(そら)とぶかりのこゑとりあつめて。忍びがたきことおほかり。はしちかきおまし所なりければ。やりどをひきあけて。もろともにみいだしたまふ。ほどなき庭(には)に。されたるくれ竹(たけ)。前栽(せんざい)の露(つゆ)は。なをかゝる所もおなじごと



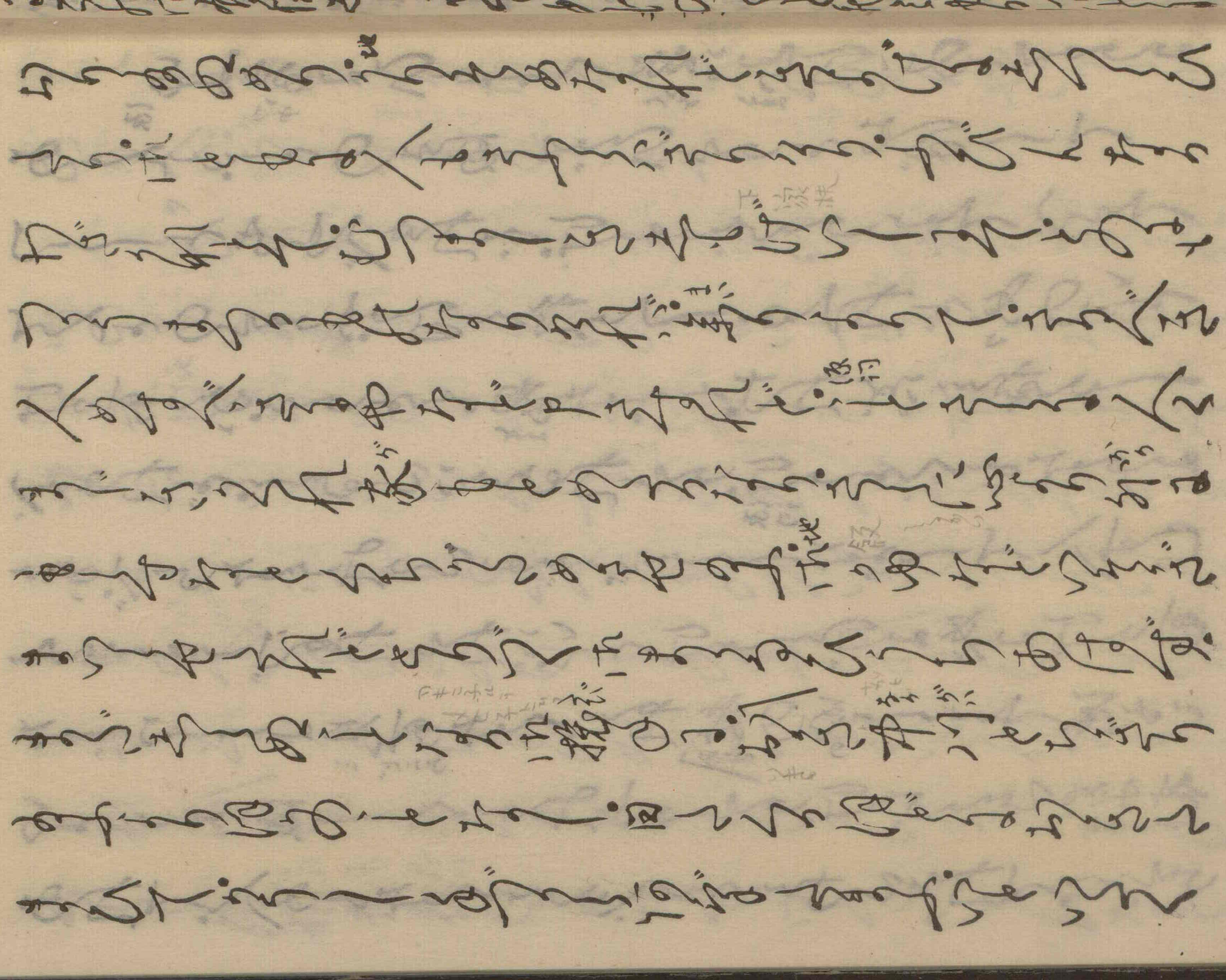


ちぎりなどまでこれめかふまうちとろ心ぞ
へなどあやまくやうがちりてよるれこる人とも
えこそぞ人のおもはん所もえそぐり給りぞ右近
をめし出て御身をめきせかそれ車ひきいれさせ
かふこれある人ごもかゝる御こころざしれをろゝる
めをこしれぞおぼめしながらこれこ伐かけ
男(きこ)しこり明(あけ)がたもちうなりまゝり鳥(とり)のこゑな
どは男(きこ)してこゝろけさうじまやあんぐぐ打き
なきびこうこゑまめうづくぞ男ゆるこちねのけひ
こへがこげまとこなふこと衣(あれ)まあしこれ家り
ことなしぬ世をなまをむさぼる男のいのりまと

アメこまふ。なのもこうらい導師とぞおがむなる。
（源詞）かれさくこまへごの世とのこくせんざりかりと。
あそれがりのて
（源）がばそくがをこなふ道をしるべまてこん世も
ふきちぎりたがふ。ちゃうせいでん生数のふるさしあしは
ゆしくてぐれをうはさんとはひくさかへて。ミろく弥勒の
世をぞうひまふ。ゆく地されのれしみめいとこちこし
（タ）されの世の契志しるゝ力のうさは川すゑ
かれてたのこがこさよう地やうのすぢなどもさうさく
こゝろもとなりめり。いぎよふ月はゆくりなくあく
がれんことと。ぬ（タ）ぬまおもひやすしふどくのこまふ

程(かど)まんかは雲(そ)がくれてあ字以(ゆく)元(そら)いとおかし。りし
ふるさほどはなかるぬさ紀はと。例(れい)のいそぎいでまふ
て。かろうかうちのをまへれば。右(うえ)をぞのりぬるそ
のわたりちかきなるまぶし院(かん)はおりしましつさて。
あげりめしいづる程あれたるうどのしのぶぐと
しぐりて。こゝ何ぞとれたる。ことしへなくこぐし。
務(まつり)もふくつゆけさは。すぐれをさへあげたま
へれば。代(係)袖(そで)もいたりぬれはかり。まゐやうなる
ことはなるはぐりつる。代(心)ころづくしなること
まもありけるかな
いましへもかくやは人のまどひけんわがまゐ

さしめさめれこち。たゝしひまくりやとのまよ。
夕かぢしひきる
やまがつのこゝろもしらずりなくはの色
まそかげやしなんぐろばそくとて。花おそろ
すずかげまちひされば。みのさしつゞきひかすまねの
うろかえひゐらんとおもしくおぼそれ草以後
あそてまつの蕊まおなしなどよそふほどか
らんまれ車ひきかけて立さまへば。なとえんあり
心ちしてきうくるのことなどいへしれず思出（おもひそ）
そり。あゆげりへこじくけいめつなりく乱色
まこれ有様（ありさま）ちうそてぬほのぐとゐきゆかつなど



あれて人めもなくちかぐとこわるされてごぐち
いとうと成しくもれかりたり。けぢうき草木
などいことは見所なく。これ秋の野にて。池もこ
くさまうづもれられば。いとけうとげに成まけり取
りかべちなうれかるまぞ。ざうしなどして人すむ
べかめれど。こるるはなるれたり。けうとくもなりま
けり取りかさりとも鬼などもかれをだこ程なし
てんとのたまふ。自て行うしのへれど。めのいと
つしとせふべかれど。げにかぐりまてへぐて
あんもことのさ成しぐひたりとおぼして
ゆふ家にひもとく菅は玉ぼこのたりは

えしえまことそ行りそれ家(源羽)のひかりやいかまと
のまへに志(タ)りめまことをとて
ひ(タ)かりありとこしタがかのうは家にそそれ
時のそらめ成りと。はのまいふ。おかし(源心)とおぼし
なす。げ(池)まおとけまへるさ海世まなく。取りしまいて
ゆく志さまでえしまふ。つゝさ(源羽)をずへぞてまへるつる
さま。あらはさじとさへるものは。いまぶまのり
しまへいとむくつけしとのまへどおまれ(タ羽)こなれば
とて。さすがまうらとけぬさ海いとあいぶれたり。よ(源)し
これもかれからなめりとうしこうけまうらひ
くらし給。推光(れ)君(ミツ)(ぶね)。こさそてけそぶもれなど

まつ寸。花（惟光心）をかいたんとさすがにいとおしかれ
ぞ。ちらくもえさふらひよりぜ。かくまぞこどりあ
ゆうさ給まおりしう。ぢもありめべき。さ海まうそ
くとをしたうらくおも。我いとよくさひよりぬべう
ゆしこと。我ゆづり。聞えて。ふひろきよなどめざ海
しうさひとう。ふ（タ）とんなくしげうるうゆふべの雲
とながめ給て。おくのるはくしもれむ一くしと
めはさられば。ぱ（源）しのすぶれをなぞてこひかし
りへり。夕ぞんとこうはして。ぬ（タ）もかうありさ海
と。思ひのほうまあやしうさ心ちはしながらよろけ
のなげきまされて。すこしうちとけゆくけしこさ。

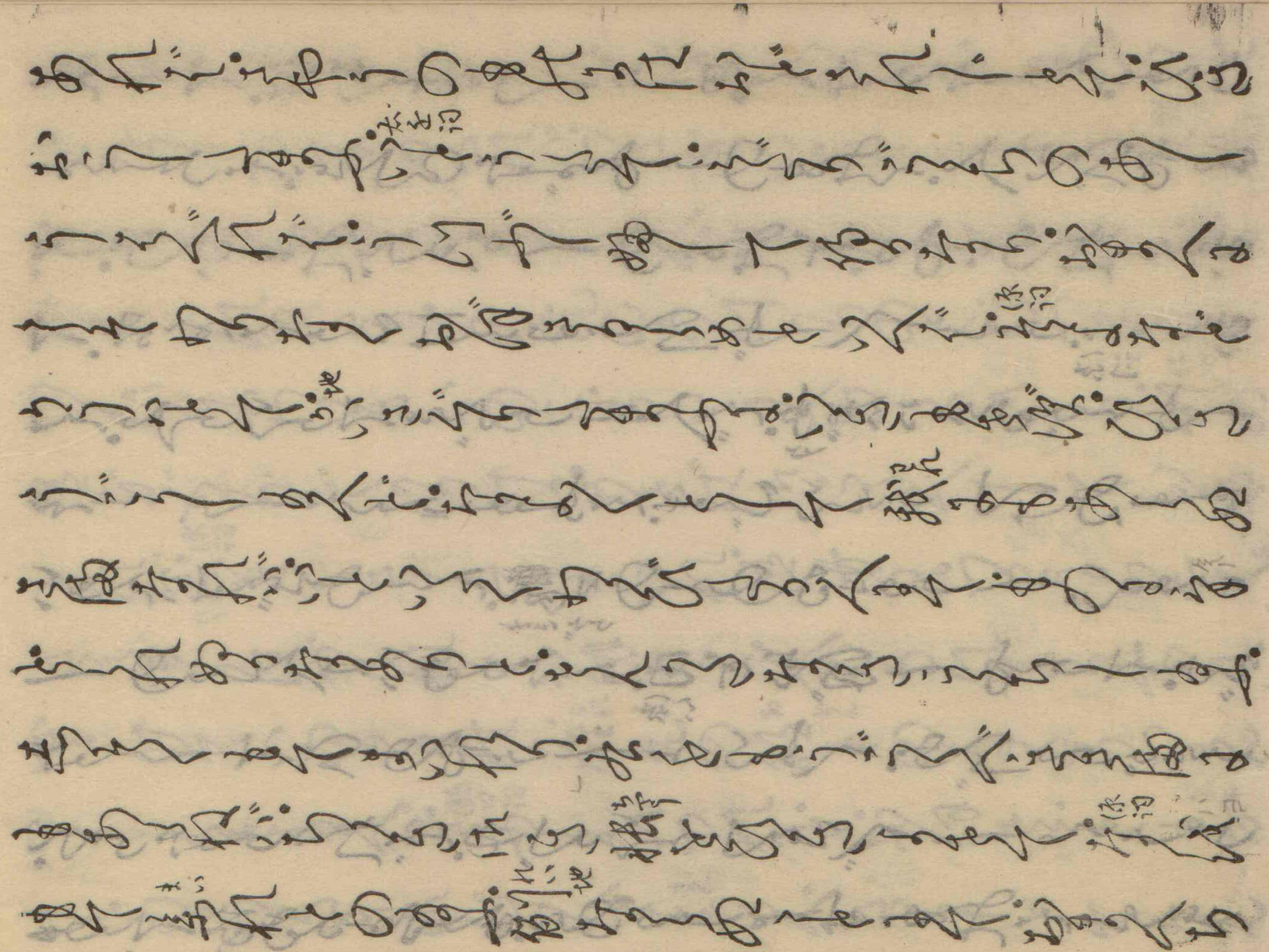
いとらうたし。つとはれくはしまそひくして。相
とことおそろしと心ひさるき後。わう心ぐるし。わう
しとくおろしまて。れとなぶらまいしとて。名物
なくなりまゝる。れ有様(ミあり さま)まて。なと心のうちのへぞて
のこしまへるなんつきとうしこゝまふ。うちまいる
もとめさせまゝんといづくは。親(ぞ)ぬくんとおぼし
やりて。かけはあやしのころや。六条(でう)わたり(法息不)まも
いまおもひこゝれしまゝんうしこゝれんもく
別しうことくりなりといとおしさすぢはまづ
ちひ罪しまなる心もなきさしむ(タ)かひとあくれと
おぼすまゝまあまり心(法息不多)ゆくこゝろひともくるしき

れ有様をすてしとりすてぐやと思ひくべれな
けるよひすぐる頃どもすてしねいりのへるに添ノ
くらがるるいとおかしげるるあぬてどのがいと先
でしとこまるをぞこぞひもおもほさぞうく
ことたすことたまきへをぬておそしてどきめし
のゆゑていとめぎ海しくつゝそれとて この御か
さまゝの人とうきおこさんとすとこのふ添心ものな
をこゝろ心ちしておどろきのそれが火もさしな
ゆりうこておぼさるれバこちとひさぬさてうち
玉(をき)のて右をとおそしのふこれもおそろしとさひ
こゝき海まてまいりよれり添詞わる夜(どの)たるとのゐぐ

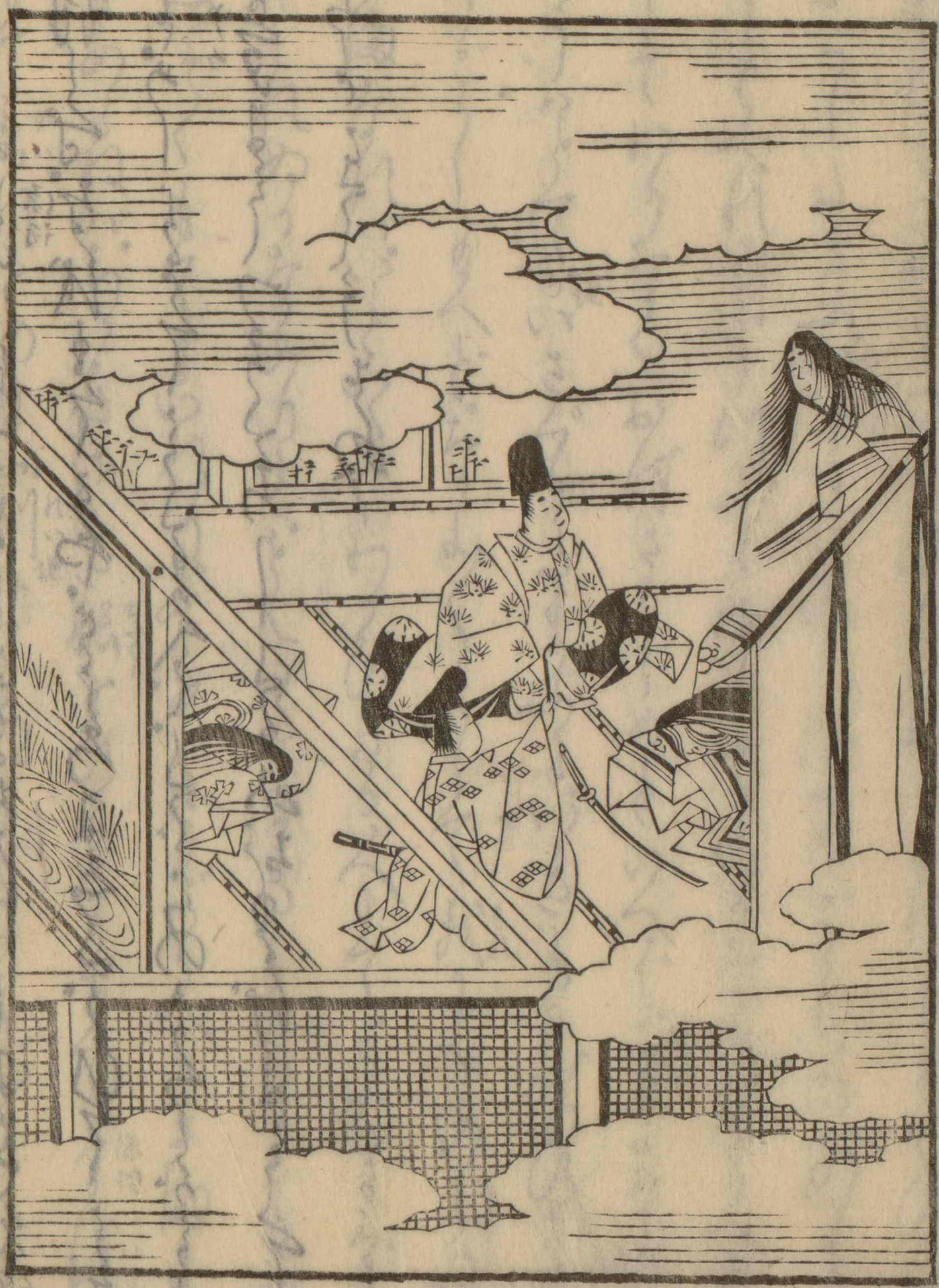
かうして志そくさしてまいれといへとのうまへだ。
いかぞかまうしん。くらうてといへば。あなかかくし
とうちわしひのひて。ぐまをしてきのへば。山びこれ
こうゆうしゑいとうとまし。人ハえ寄つるぞ。無しぬ
まこのめだいこじくわるくきまどひて。いかさ海り
をんと志へり。河をも志とくなりて。われの氣色
なり。おおぢをなんわりなくときせのふ。市上にて。
いかなおぼさるくまうとゆ。いとうらは
くてひるもそくをのこみつつもれをいとおしと
おぼ志て。われ人をおこさん。てくけぐやまびこれ
こうゆいとうさし。こうまも志ぐちくとる。

ゐをとひきとせまひてましのつまゞ戸はいでくど
をなし何事ぬへれバわる夜の火もさしまなり。風
すゝしうちふきたるに人はすくなくてさふし姫が
ぎりこれねたり。この僥のあげかりのこむつましく
つひまふわるきおのこまるこうへわるはひとり。例の
隠がぐりぞなりけるめきばれこゝへしておき
これバ志そくさしてまいれ隠がもつうちまて
こゝぎこはづくれとおほをよ人ぞなれたる事は
心とけていぬるもれが摧光の親卜のさゝりつゝん
いとくるをまへバさふしひつれどおほをごともな
しあるつきはれむかへは氣るべきよりとてなん

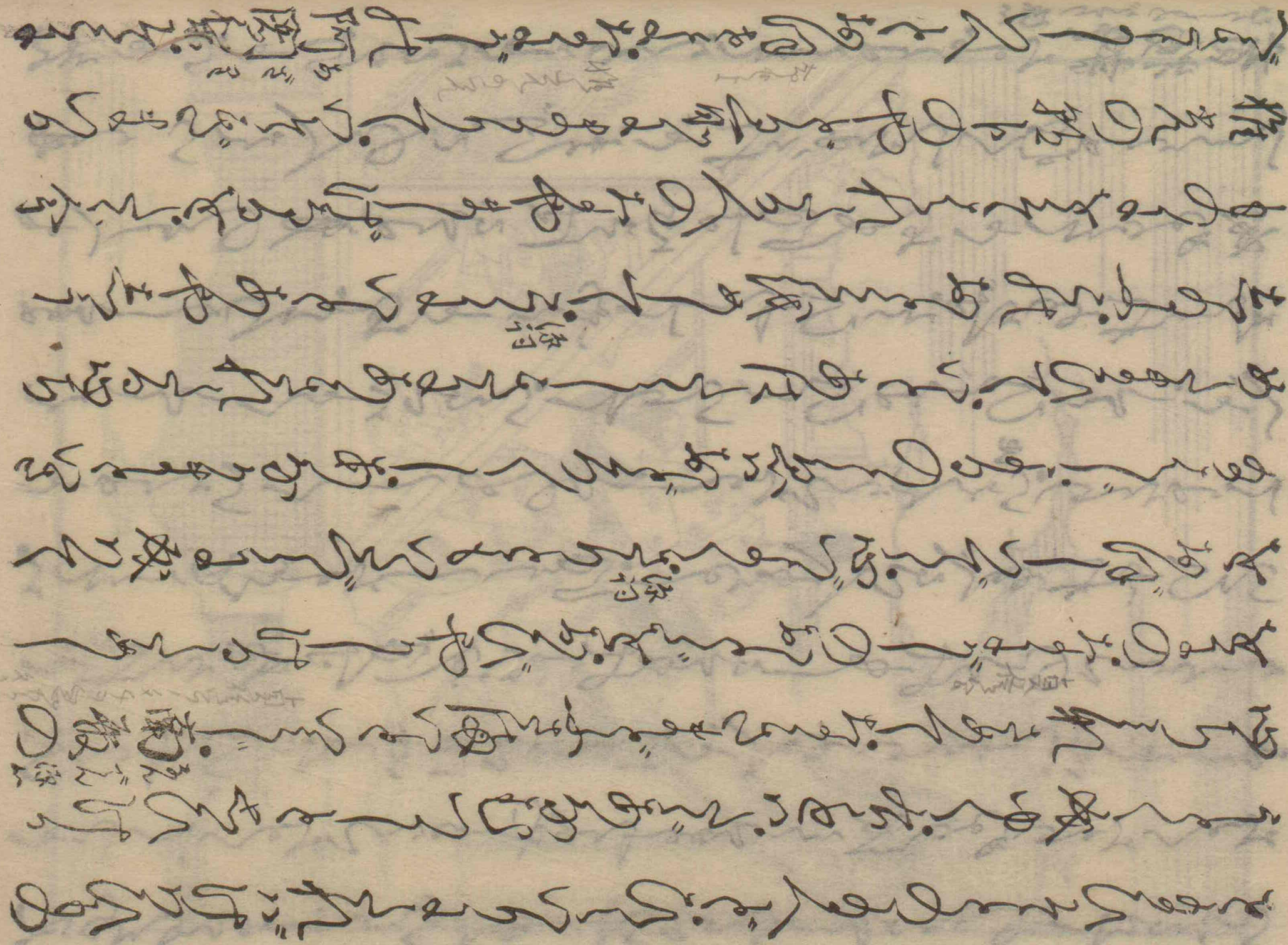
まんぞ。ぬるとゆゑ。このうつ中すもれたこゑ
ぐらなりそれだ。ゆづりいとつきぐしくうち
なしして。ひあやうしといふく。あげうりがざう
しのうへまいぬるなり。閑（係ん）をおぼしやりて。なぶ
いめんハすぎめしん。鵜口（てきぐち）のとのゐまうし。いまこ
そとをしたりのふさまぶいたうかけぬまゝ
ゝ。へりいりてさぐりもへだ。女（タ）ぞんハさるがらかし
て。右をさうるはうまうけぶしくしたり。こゝろか（係詞）
ぞ。あかもれぐらおしのもれをぢや。あれこゝか
ところ。きろるなどやうのもれ。人なびやき
んとて。けおそろしう思ひすなまんまろ

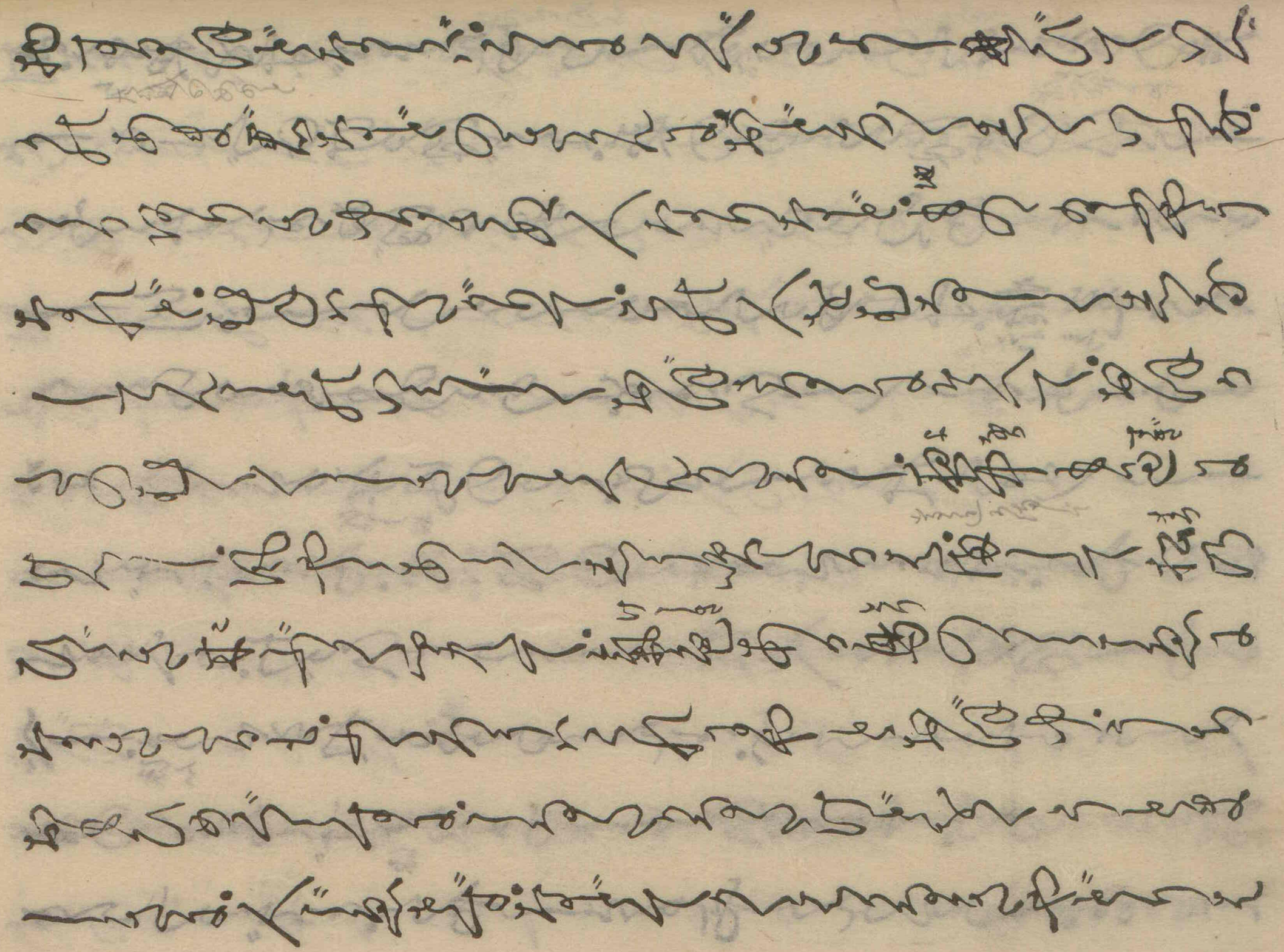


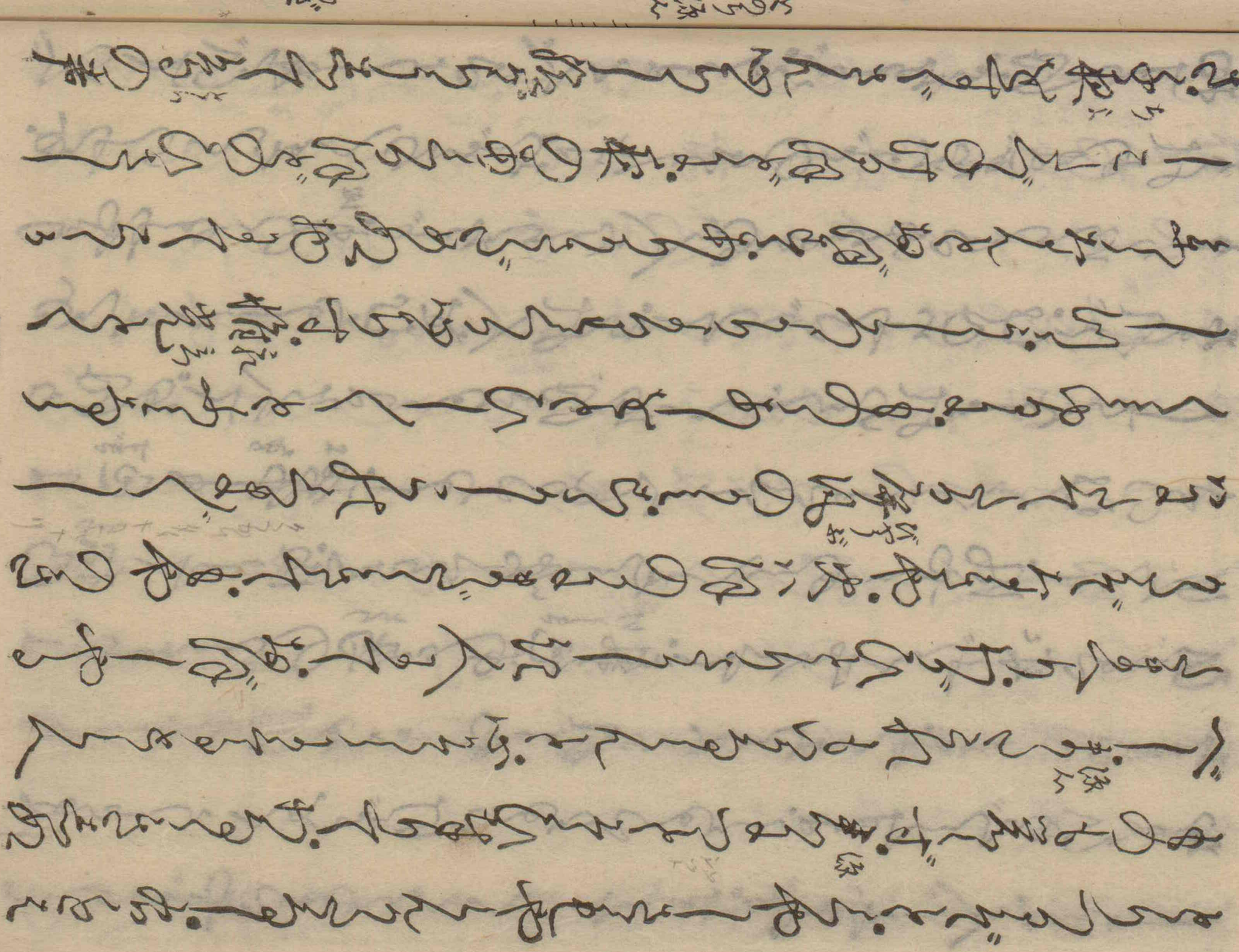
くえまいらぬつまし さるほうげしまもえの
ぼらぎ（係訂）なれもてこそ
とめしらもてこそ
ゆめ
夢まもしつるうちしるぬおもげまして
かとまさしうもぬ



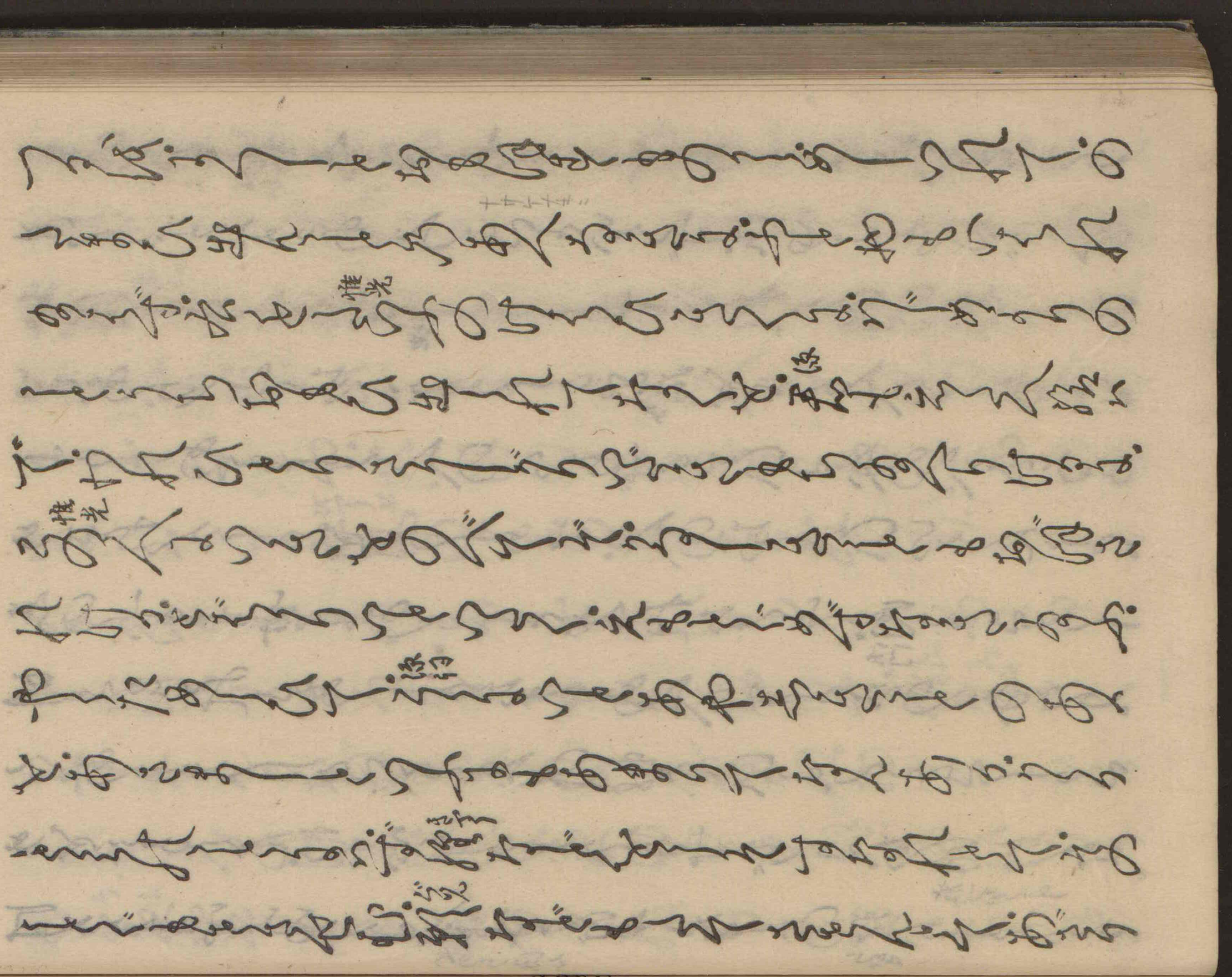
昔物語（むかしものがたり）などまことそうらことはさけと。いと先づうらまむくつなれど。まげこの人もいかな成ぬるぞとおもほす心さはぎる。身のうへもしられなかず。そひかしてやくとおどろかしまへど。こゝびしまひしいりて。いきはとくしてもてまかりぬ（地）とんかるなし。このもしくいかまといひかれなべき人もなし。ほうしなどをこそいかうるのこれもしきもれまはおぼす。色かれどまこそ心づかがりなへど。けうきは心まて。いふかひなくなりぬる。紙こゝまふまやるうるなくてつといぐきて。あがきこいきいでのへ。いうじきあるみ見



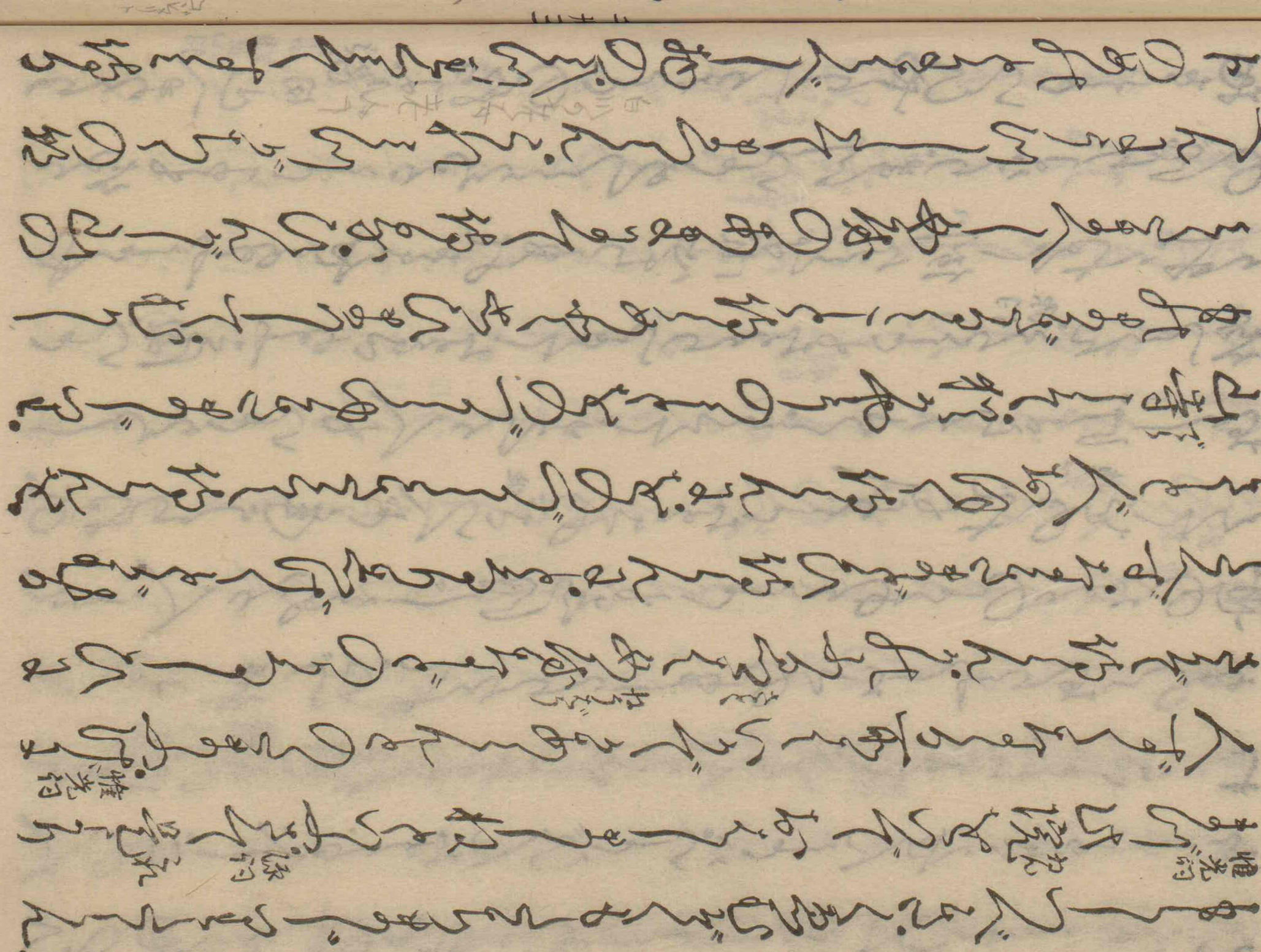




はるかは望ゆるは命（いのち）をかけてなよの契（ちぎ）りよろ
めをこゝろしん。わが心なりがしらすぢは。おほけ（荒つゆくす）な
くあるまじきこゝろのむくひよりこゝろ
りさきれしあしとなりぬべきことあるなめり。
志のぶとも世にあることうれなくて。内（法門）にきて
めされんことをしめて。人のおもひいたんこと。
よりしめきしきんべのくちずさひにぬべきなめ
ゆきありくてかくがまりしき居（な）をとるべきなると。
おぼしめぐらす。地（ぢ）うしてこれこれの躬トまい
きりよりなりあつきといたず。此心にしるがへる
ものゝ。こ（こ）衆（よひ）志もさふしきぞめしにさへをこゝろ



抱きといひやりつゝとの給ふ。唯（きのふ）同山へまゐり
のぼりまゐり。まげいとめづらかることもも侍り
かれ。かねて例（れい）なるず。心ちもれをさせるのふことや
侍つらん。ざうこともなりつとそなるさのふさ海。いと
おしげまらうさくこゝそまつる人もいとうるし
くて。どのれもよくとなるさあ。ざいへど達うちねび。
世のなるのとあることも。志得じゝある人こそ。
ものゝおりふしれるのもしりられ。いづ稱もく
わかきどちまて。いたんかるもなるれど。この院（ゆん）もり
なとゝのきらせんことハ。いとびんなるべし。この人
ひとりこそむつましうもあらめ。どのづらゝ抱いひ



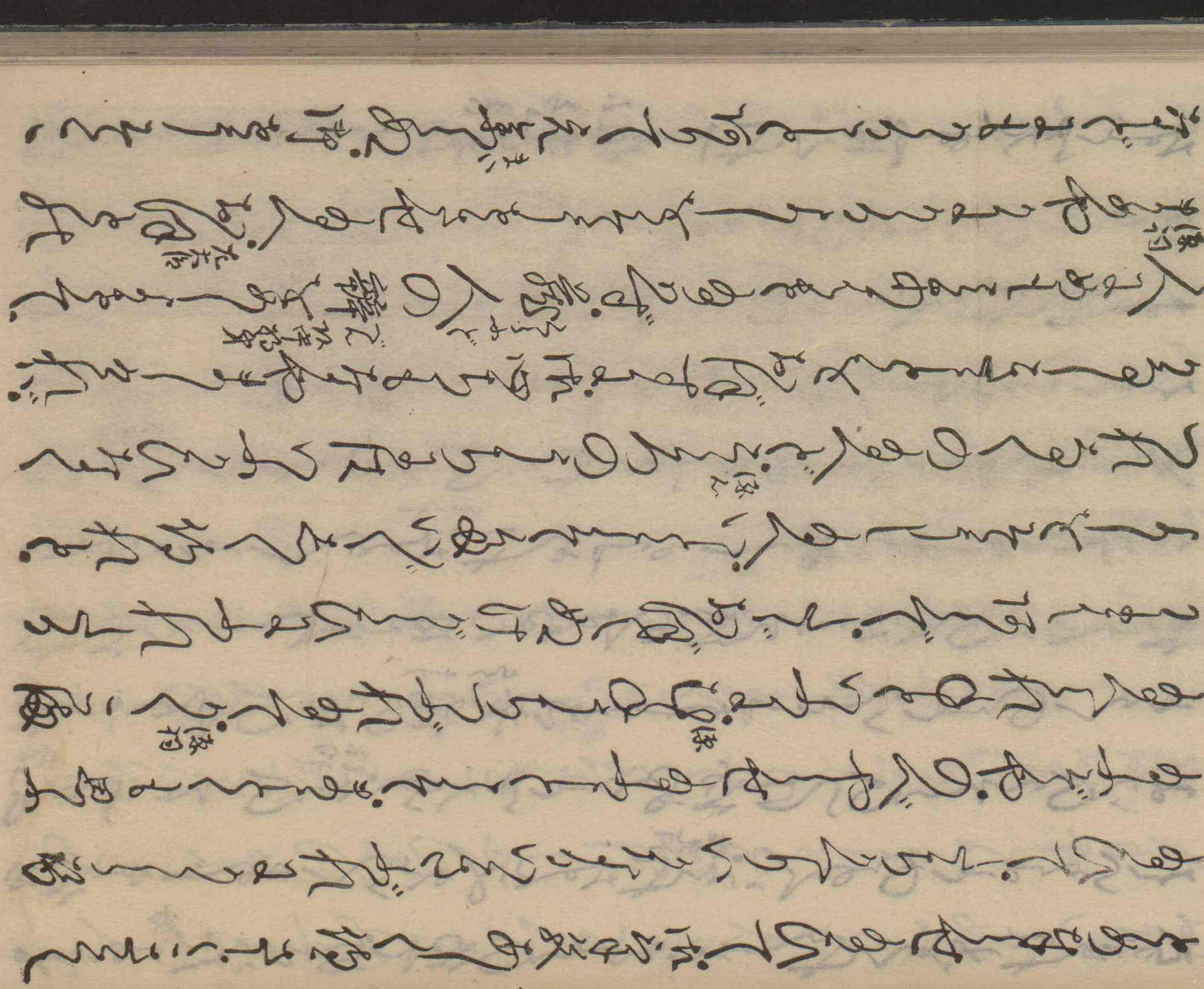
もしつべきこゝろむぞくもしちまじ望こゝろん。
惟光詞
まゐ此院(かん)をいでおはしましねといふさて(源詞)是(これ)より
人ずくなるゝ所をいかでかあらんとのこまふけ(惟光詞)ば
さぞ侍らんかれふるさと(ねうだう)めなたどのうるしひは
えへずなきまどひ侍らんにとるりしげくとがむる
さとべあはく侍らんにとのづからさて侍らんを
山寺(でら)にて狩かやうのことをのづからゆきまじ望。
もれまゐざることと侍らめやさひまりしてむりし
ゝこまへしめ家のあまりまして侍なひんがし山の
へんまうけしてまつらんこれこれがちくの給
トのめれとまゝべしおのぞいまつてすゝ侍る

なりあたりハ人しげきやうに侍れど。いとかごかに
侍るとてあけはなるゝほどのまぎれに。御車よせ。
この人をえいだきたまふまじければ。うはむしろ
におしくゝみて。惟光のせたてまつる。いとさゝやかにて
うとましげもなくらうたげなり。したゝかにしも
えせねばぐしハこぼれいでたるも。めくれまどひて
あさましうかなしとおぼせば。なりはてんさまを
みんとおぼせど。はや御馬にて二条の院へおはし
まさん。人さはがしくなり侍らぬほどにとて。右近をそ
へてのすれば。君ハむまハたてまつりて。われハかちより
くゝりひきあげなどして。かつハいとあや

あくおぼしめさるれども、これ気色のほどもござなくと
こなれば身をすてゝりはござれおもえておりず。
われらの命をかておりつきさかりけれども、いづこより
おりしまゐらするなれども、やましげなきさせおはなど
ひへどもこゝろ情のうちはいりあひてむねをさゝえて
かゝるいとほしければ、などてのりそひてゆかざ
まつりんぜんさかりけんとさいかるかちもんだ
すてゆかさ別なかりとごうてやさゝんと心おもひ
の中ままおぼすなれども、さあふらうちとすゞ
れども、いくみもあつさうちそていとくゝし
くまゐられへぬ、ふかうそうてかれもいとゞふ

成ぬるなめりとおぼして。日ごろくなれど。おさあが
ゆるしなれば。人ぐあやしがりて。はかゆなどそぐのう
しゆゆ秋ど。くるしくて。いと心ぼそくおぼさるゝ。
内(内門)よりはつるひあり。昨(きのふ)日もえこぞ出(いぞこそまつ)なりしより。おぼつるながらせのまふ。おほ(た大臣)いとのく。恚(まん)ぐち。恚(まい)
ゆるへど。頭中(とうのちうじやう)将ぐりとこちながらこゝるゝ
いりしまへとのまひて。これのうちながらのまふ。
めれ(原詞)とまて。侍るものこれ五月のころほひより。
おもくわづらひ侍しがかしらそりいむことうけ
などして。それ志ましやまゝがくりしを。
これどろ又をそりて。よはくなん成ましろ。今ひと

さびとふてひこよとやしらしかバいとさなるさ
よりなげさひしやの。いまハのさぞこゝよつくし
とや思ふんと志のへてまゐりしよそれ家なり
けり下ぐのやまひしけりが俄(スハク)よえいきあへぞる
なく成よけるをおぢさぐうりて日をくらしてなん。
とりいで侍けるほきつけ侍しうば神(クミ)ゟ(カざ)すなる
はいとふびんなること也ふのへがしこまりて。
えまいらぬなり。此暁(あつつき)より志はぶきやこうや侍ん。
りしらいといくてくるしく侍れバいとむらいまて
罪ゆりことなどのくまりふ。中将(双中将)さらバさるよしを
よそ奏(そう)し侍らぬ。和辺(よべ)もれあそびよりしこくも



など笑ふ日くれて惟光(これ)(こう)(まい)来れり。うろけがくひ
ありとのこまひて。まいり人ごもこれこちながら
まゐばれば人しげくぜめしよまそて。(源氏)いりのぞいま
くとこそてつやとのゐふまくに袖(そで)を御りかに
としあてくなさのふこれこれもたくく。(惟光氏)いまハ
くざりまゐてハ抱しのふめれ。(さてイ)たゞくとこもり
侍らんもびんなさ候。おするん日よろしく侍れば
とくのこと。いとこしとき光僧(らうそう)の所ひしりで侍
ないひくこひつけ侍ぬると罪ゆ。(源氏)そひこりつゝ(右を)ぬ
そいりよとのゐへば。(惟光氏)それなん又えいくまじう侍め
分。これもとくれじとまどひ侍てげさハた(谷)まくも

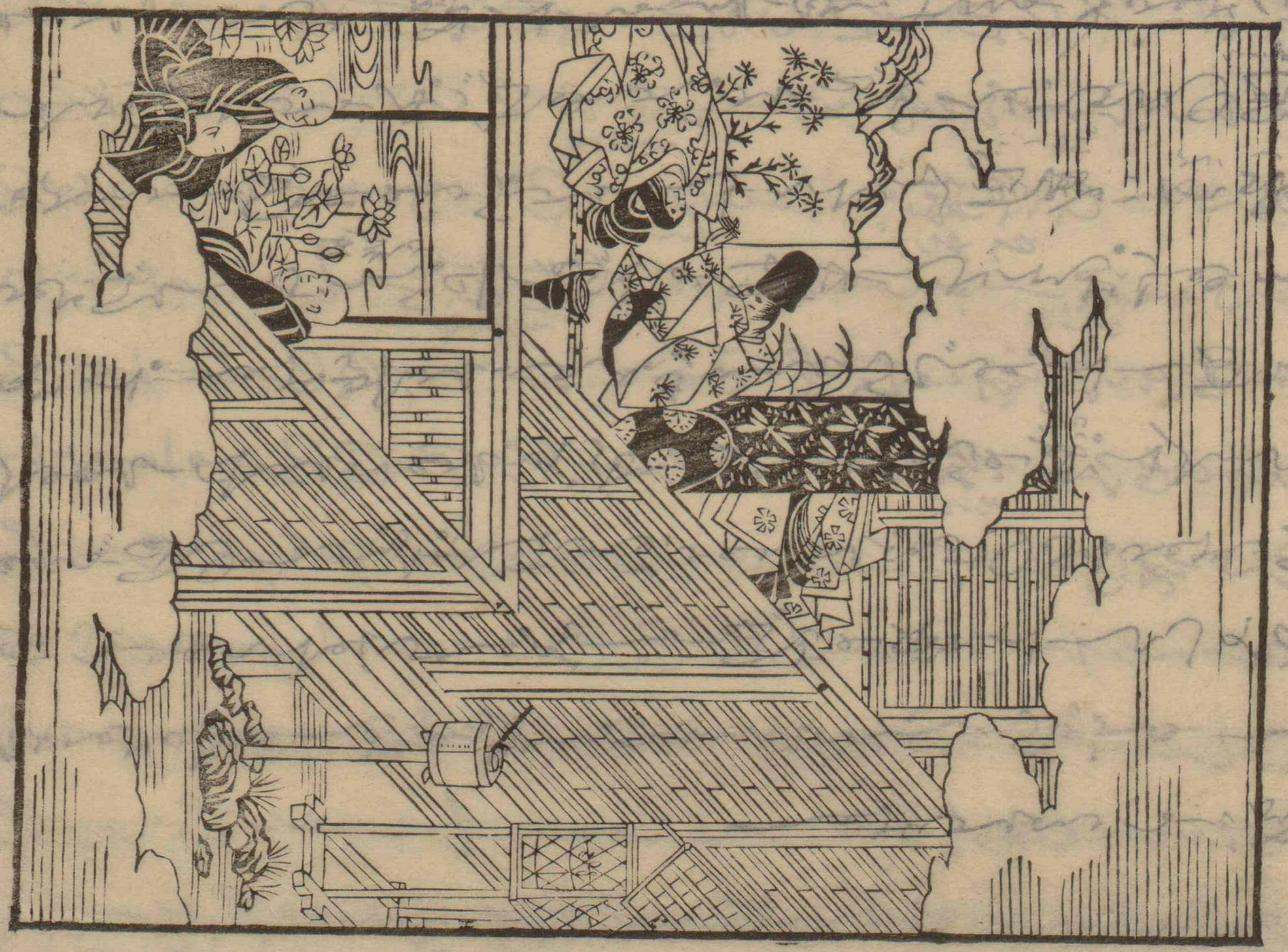
おちいりぬべくなんこゝまへつゝかれかゝさとぐ人は
つぎやうんとゝをど。しばしはひしげめよ。ことの
さ後おもひめぐらしてとなん。こしらへをき給り
つゝとゝゝりまゝゆりまくよ。いと（源心）いこじとおぼして。
かれ（源詞）もいと心ちなやましく。いかゞべさまとるん
おぼゆらとのゝまふ。なふ（惟光詞）ふりさらはおもほしもれ
をさせまふ。さらべきよこそよろづのことゝ給ふめ。
人はもしもしさじと思ふ。ふれば。これこゝにおりさちて
よろづはものし給などゝ。さ（源詞）しさゝれおもひ
なをどこゝりひさゝ心のすきひよ。人をいさづくは
なしつゝかごとおひぬべきかいとゝきなり。お將（せうしやう）

の命婦（惟光が妹之）なるよもさうすな。あま（大式）ぎまりしてかやう
のことなどいさめらるを。心ちげかしくなん。覚（おほ）程
べきとくちがこめ給。さしぬ（惟光詞）ほうしぶらなどまも
これいひなすさ海ことま侍りと。罪ゆりまぞ。かくり（源心地）
おへる。ほのきくぬ所など。あやしく何ぞなる
ん。けがらひのかしのまて。内まも乗り給ぶす。又かく
さくめきなげきこまふと。ほのぐあやしがる。
さしまことなくしれをとぞ。それほどのさほう（源詞）れ
おへど。なまかことくしくしてべきまも侍らずとて（惟光詞）
しけが。いとうるしくおぼさるれば。びんなしとぞ（源心）
べかれど。いま一こびかれなきからともこぞらんが。

いとゞをうるべきぞ。馬(ひま)まてもれをんとのまふを。
いとゝいぐしきことくはせへど。さおぼされむも(惟光ハ)
いりぐちんぞやおらしまして。和ふけぬさきま
うへしをおりしまをとゝとば。此(源也)ころのれやつれま
まうけのへるかりれれさうぞくきうへなどして出
給。れこゝ給うきくしいとじくこへがうけ給だ。
うくあやしきこゝちよおこちてもあやうりしお
こりまいりまをんとおぼしわづらへど。れりうしさ
のやうりうまくこゞいまれりしをこぞ。まるいの
世まりありしりうちをもこんとおぼし念(ぬ)じて。
例(れい)のこゝ(惟光)ぶ(ずいじん)身をぞして出給。こちとをくえゆ。十七

日の月さし出て、かはらのほど、ぬさきれ火もほの
かなるは、馬べ咎くりたなどこゝやりたる程なるぞ、ね
むつしきもなるとも見えし給ひず、かきみぶる心
ちしかておもしつきぬ、あらりさへすぐさは
いる屋のかるはしまふしたてゝ、とくなるあまれ
すまねいと哀なり、こゝあしのげほのますきて
こゝ、それ屋まはぬひとりなくこゝ忍のうしてゝ、この
かるは法しぐらの二三人物語しつゝ、わざとて
忍ひてぬ念佛ぞすゝ、寺ごのそやもうかをこるひ
たてゝ、いと忍めやかなり、清水のうるぞひかりはほく
えして、人のけくひもたげかりけり、これあまぶられ

こなる犬とられ。ふるしとくて。聖うちふくるる。
洞のうちなくおぼさる。いりぬれば。火とりそむけて。
右とは屏風へだてかしこりいりまひしかんと
しぬふおそろしきけもおぼしず。いとらうらげなる
さ雨して。まぶいさくかくりたる所なりしてを
とへて。我はいま一こびふるをうせしまへ。
いりなる昔のちぎりまかりけんしぞしの御どる
心をつくして。衣はおぼしをうちすてまどく
しぬふがいとしきことくふるもおしまずるる
給ことかぎりなし



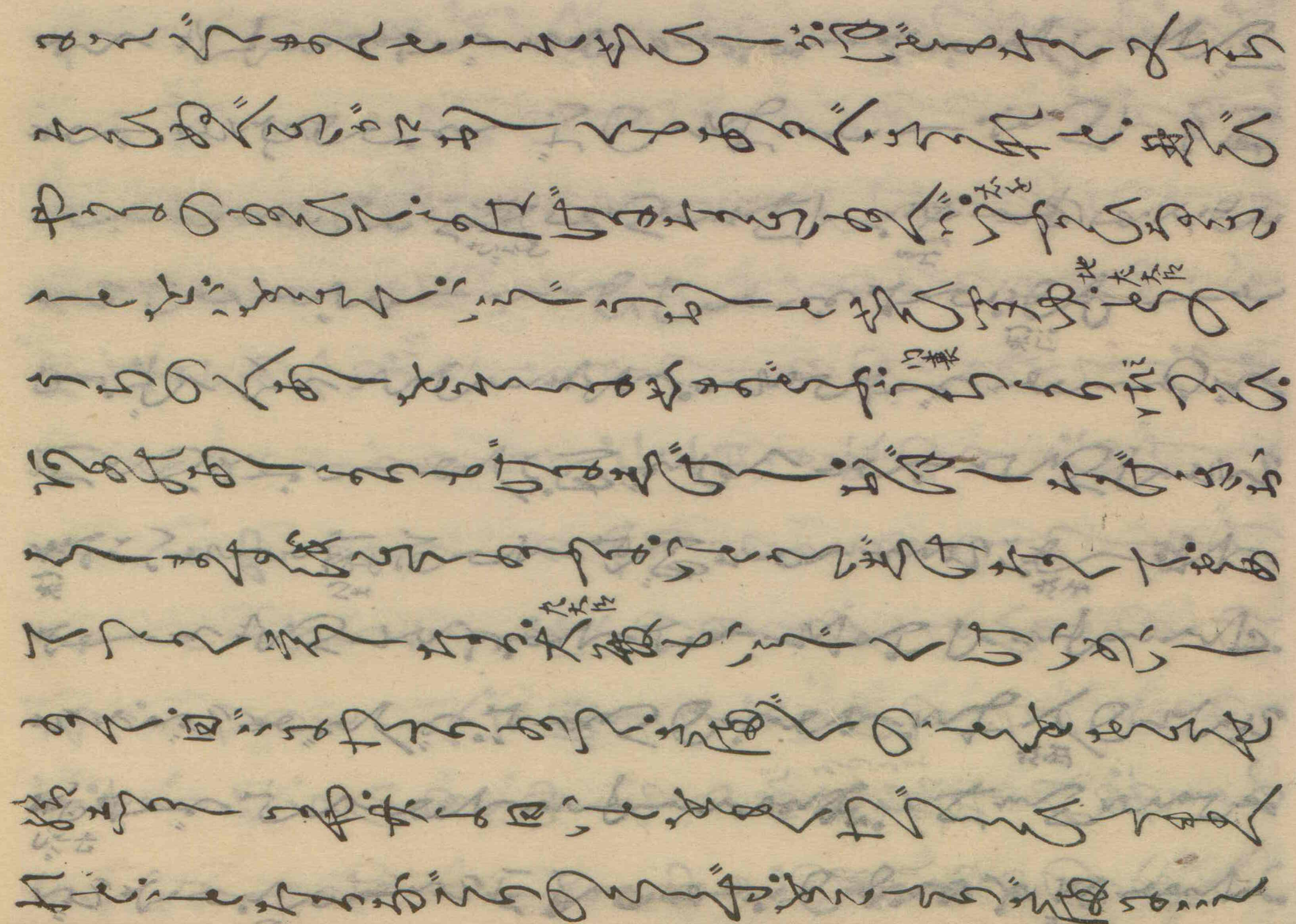
犬（伏）とこたちもこれとはしらぬよ。あやしとこひて。これなるだおとしけり。公（源司）をとゞいぎ二条院（でうのゐん）へとのゐへど。年（としなを詞）ごろおさるゝ侍しより。かゝ時（とき）立（たち）なれ。年（とてまろ）ばしず。なれ。罪（きこ）のつゝ人ゝ。ふくらまれ。こそまつりて。いづてまりかゝり侍らん。いかなりなりゆひふさとゝ人ゝもいひ侍らん。かるしきことゞさるゆゑて。人ゝいひさはがれ侍らんがいとしきことゝいひてなきまどひて。煙（けぶり）ゝこゞひてしたひまいりなんといふ。（源司）とくりなれど。さるん世中ハありわれといふものくるしからぬハなし。とあるもかゝるもおるじ命（いのち）のかぎりあるものゝまるん

あり。さなぐさめて。われとこのめとのなひてしら
へても。かくいふ我身（コガミ）こそ。いきとまるまじき心ち
すれとの給も。（地）これもしげるしや。雅光（よ）兵（あけ）は明がさま
なり侍ぬらん。ぞやかへしせのひなんと。ゆれば。
（遠）かへりこのことをしれて。むひもつとゐるがりていぞ
ゐふこちいと家けさよ。いとぐしさあさ（ざり）務て。
いぶこともなくまどふ心ちしのふ。（夕）ありしるがら
こちゐしうつる夜。うちかくしこまへりしが。
わがくれなゐの中ぞのきこれとりつるなど。いか
なりけんちぎりにしとこちすがらおぼさる。御馬
まもそがぐしくのりゐふまじき中さ夜なれば。又

これをけそひこすけておかしまさすかにつくこれ
程(かど)にて馬(むま)よりすべりおりて。いとしくれ心ちまど
ひかれば。(源詞)かうこちの亀(そう)にてとぶれぬべきこゝやあら
ん。さらにえいきつくまじきさ心ちなんすると。のまに
に。これをけもこゝちまどひて。ゆゞくりぐしくん。さ
のこまうふともかゝる道(こゝち)にねていでなるべきかはと
かまふにいと心あくこくしかれば。川(かハ)の水(ミヅ)にて。ふ(て)成
あらひて。清水(きよミヅ)の観音(くわんをん)とねんじまりてもすべなく
しひまどふ。(源)こゝみもしぬてはこゝろをおこして。心
のうちに佛(かとけ)を念(わん)じぬて。又こゝくこすをこれ
ぬてなん。二条院へかへり給けり。あ(地)やしう夜

ゆきはありき後。人ごとぐるしきわざかな。これ
ごろ例(れい)よりも志げ心なきは悪びありされ。うちし
きりなりまも。昨日(きのふ)のはなしきれいとなやましう
えしこりしまは。いくぞくどりありきなんと
なげきあへり。(ほ)まことまゝしなめるまてアー。いと
いとくるしがりまて。二三日は変ぬるまむげは
よくるやうましまふ。内にもきこしめしなげ
くことかぎりなし。はいのりうぐまひまるくの
志ろ。まつりたしへずほうなどいひつすべくもあら
ず。せまたぐひるくゆくしきは(ありさま)有様なれば。せまな
がくおりしますまじきまやとあめれ志るの人のさは

ぎなり。くるしき(係)ゆちまもの名をと石(めり)よきて。
為(つがね)なぞちくのてさふくもを給。これこれこうちも
さまぎまどへど。おもひのどめて。これ人(右近)のうぎ
なしとしひこるとも。もてなしこすけつさふくす。
まいさしう(係)傳(ひま)にりておぼさうしときハめし(右手)出て
はうひなどしまへバほどるくまじらひつさる
ゆ。ぐいとくろうしてうちなどよう〇ど。
うるわまうぐるしうしぬわうどなり。あやしう(添詞)
こじうりけれ契(ちぎり)まひうされて。亂(まれ)も世まえあり
まじこさかめり。としばのこれこうしなひて。心ぼ
そくしふんなぐさあまもしなぐんがうろげ

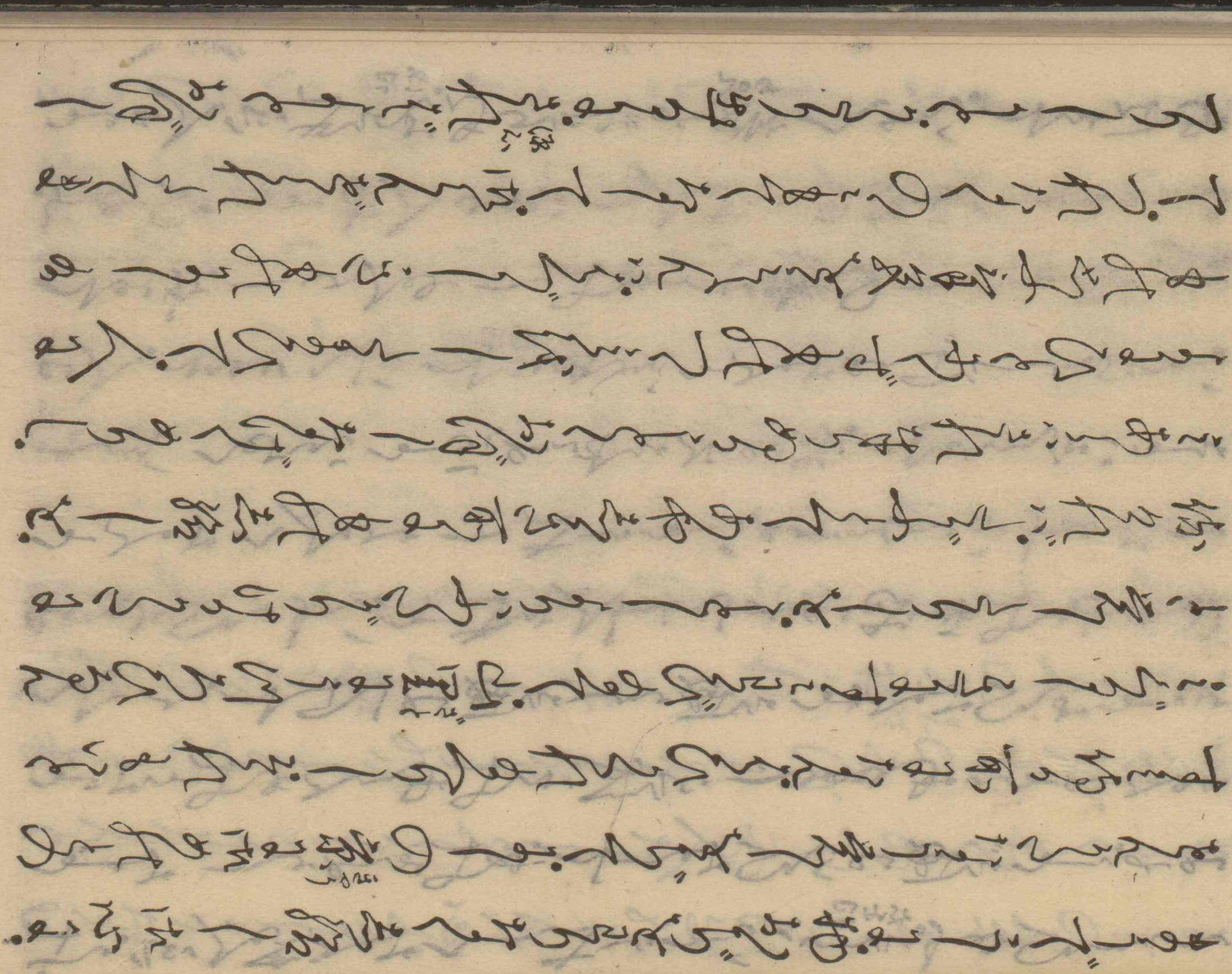


しまふけがしひいふ給しもひとりはこゝろぬな
よなれば（れ乃）お目つかながらせぬふれ心わりなくて
内（うち）のれとのゐ取る乗（まいり）給など寸大（た大臣）とのわが（ミ）れ車（くるま）
まて世うへしてまつりまて。れ抱いこゝるまやうやと。
むつしうつくしませなりまふわれ（添ん）まもあらず。
あらぬこゝろまうへりしうやうはしがしは覚しこまふ。
九月（ながづき）廿日の程まぜとこゝろまてまて。いといふ
おもやをまへれど中くいこじうな海めしう
てなかめがちまねとのこゝろまきぬふ。こまとがむう人
もなりてれものけなめりなどいふもなり。君（添）をを
石出（いで）てのどやうるうタ蓋（ぐれ）は。抱謂（ぐち）などしまて。

(添詞)
頼いとなんあやまきたまどてそれ人と思ふせじ
とはかくいはへりしぞ。(まてと)後にあまれこなり(とも)さざか
ほまさふをしらで。(へぐそ)隔のひしがばなんつゝかりし
とのおへば。(左を詞)なまどてかゝくくしきてし給ことは
侍らん。いはの程までかなまなるぬれなのりを四九
給ふんぞめりあやしうおぼしぬさ海なりし
れことなれば。うつくとも思ふぞなんあるとのおひて。
れ(な)居がくしもさがりにこそ四九し給なすがら。
な紙ざりにしてまぎこゝりしのふらめとなん。う
きことに思ひしかりしと四九ゆれば。(添詞)あいなりけり
こゝろくらべどもかなれば。しかる為ぞはかこゝろも

なりしこゝぐやうに人にゆるされぬふるまひを
なんまぐなるゝぬことなるうちにいさめの給ひ
する紙をじめつゝむことおほゆる男にて、いかなく
人にこそふれごとをいふもどころをうとりなし。
うるさき男の有様(ありさま)になんある紙ぞかれかりし夕
よりあやしうころにかくりてあかがちにこまり
しもかうべきちぎりにこそはおしのひかめと
しふも衣になんぞうちへしつゝうおぼゆる。
かうかがるまじきにてはなどさしもこころに
しこそて衣とおぼしのひかん。程くそしうる
れいまはなるまごとをうくすべきぞ。七日(なぬか)くの仏(かとけ)

さてもさがしきとう心のうちはまも思ひんとのみ
ぞおほまつりごとへぞ申させ給ひんぞうしきのび
すぐしのひしことをぞそされうしろぐらさが
なくやがて心のあるぞうりはなんおもやうらかくや
うらみをのみまさに三位中将となん申ししうらうら
まさしまれはむかひ申しまへりしぞ我身のほど
の心もとなきにおぼすありしは今さへさへいま
なずぬまし後ぞなるときにもあへてうらみそ頭中将
なぐかねはものしかし時ぞそめなくせなるて三
年ぐらり心ざしあつき優なるゆゑひなしとぞその
秋の比のかの大炊りいとおもそろつきことは申九

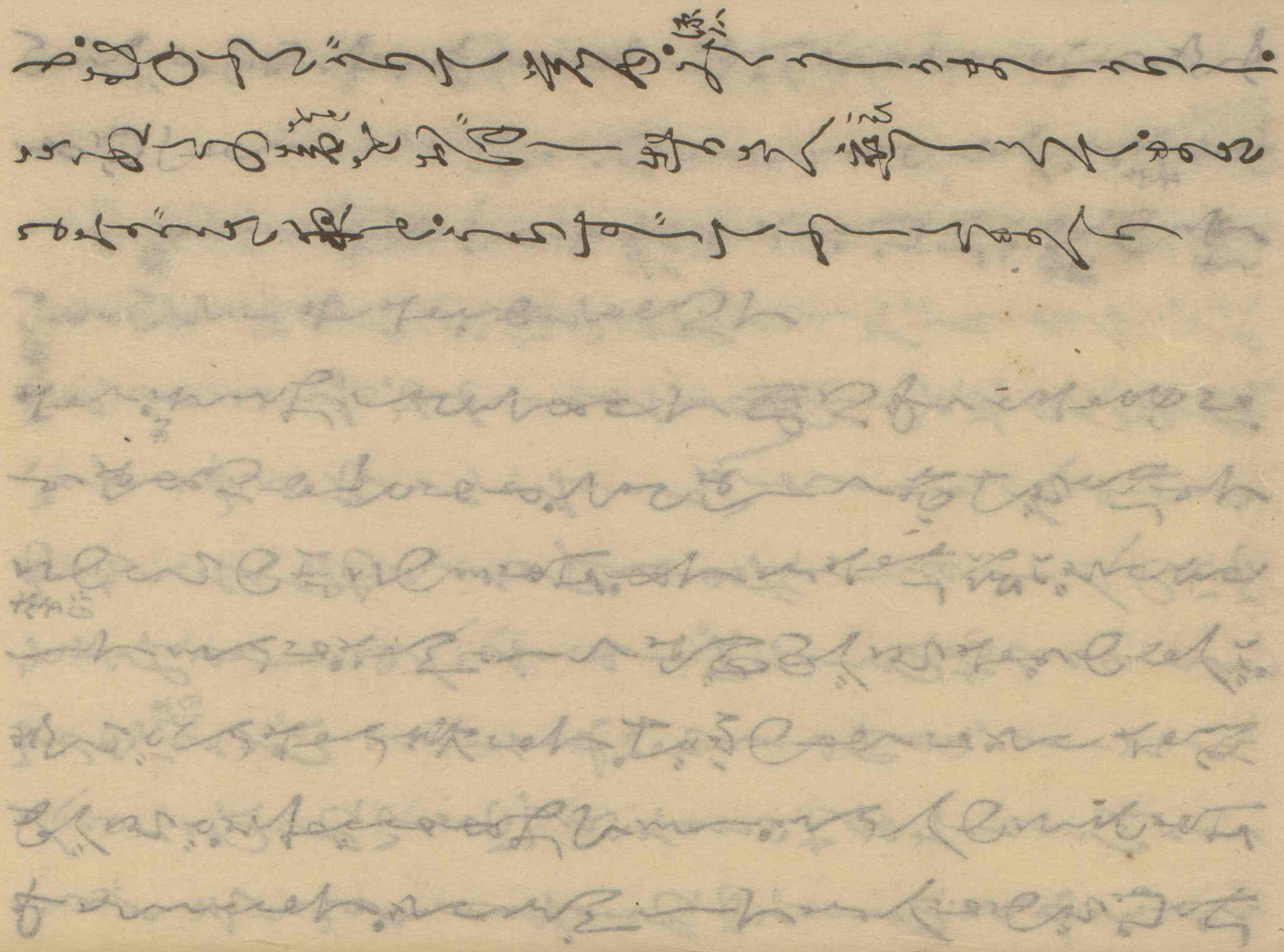


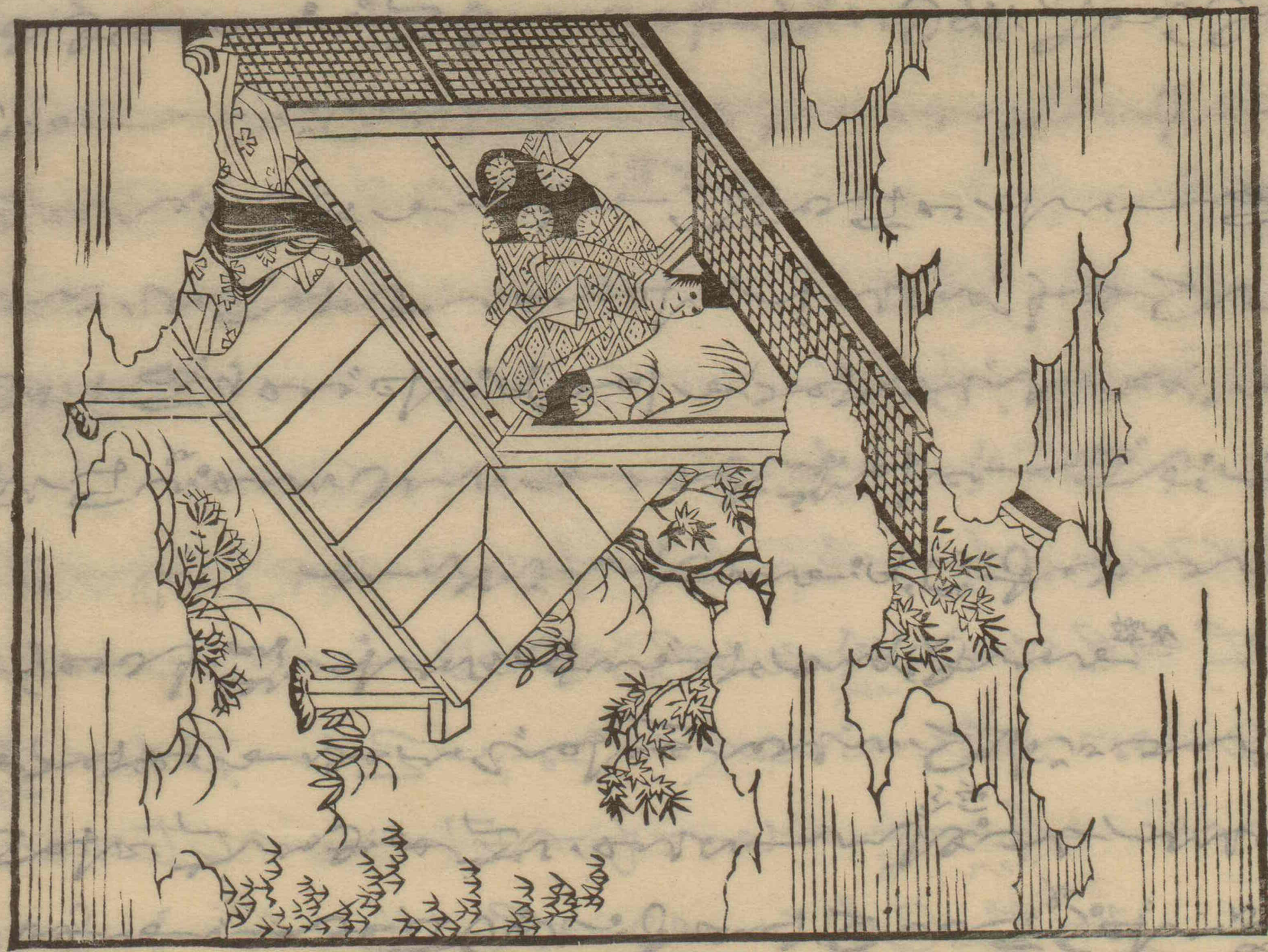
あはきて。いよく衰(あれ)もまさりぬ。おされ(添詞)さ人まど
りしるゝ。中将のうれへしハ。さる人やとゝひ。ゐふ。
しかおとくし(左手詞)の墓(たゝ)ぞ。もれしゐへりし。女まて
いとらうしげなんと。四方。さて(添詞)いづこまぞ。人ま
さとハ志しきぞ。我ま。えさせよ。ゐとゐるくいうじ
とおもふ。はかるゝまいとうれしかるべくなんと
のまふ。れ中将まもつゝふべかれど。いふかひ。まさ
かごとおひなんとさ。海ゐつゝざ。海ゐつけて。ゝくべ
まんまとがあるまじ。さ。我。それあらんめれとなど
まもことざ。海ゐいひなして。もれをよりしなど
うしひ。ゐふ。さしら(左手詞)ばいとうれしくなん。物べき。れ

ましの京までおひ出給ちんハ心ぐるしうなすむ。
ちかぐ志くあつかふ人なしとてかしこまなんと
男も夕(地)暮(れ)のしげうるまゝそられなしきいと哀
まおまへのお栽(ぜんざい)かれぐまゝ笑しの者(ね)もなきかれて。
もみぢやうく色づくほど。思まうきてるやうま
おもしろき絨こわてして。心(おを)より得りまおかしき
まじらひかれとかれ夕がかのやどを思出るもとぶ
かし。竹(うけ)の中(なか)に家(いへ)ぞどくいふ鳥(とり)のふりくかり
なくをきて給ふるかれ(源ふ)ありし院(ゐん)にこのとりれなき
しをいとおそろしとしひたりしき海のおも氣(かげ)
まらうしくおもほしいでゝるれば年(源ゐ)ハいくりまう

もれしゐし。あやしうよ。これ人なくずあしうよ。こ
え給しも。うくなすがうまじくなりゆくとの給。十九（左注詞）
まや。女給ゆん。右をいなく女よけるゆめれとのすて
をきて給ゆれば。三位の君のらうたがりまて。これ
ゆあたりさらず。おふしたてまひしを思まひ出れば。
いかでか世に給ふんとすらん。いとしも人にとく
やしくなん。物をうるげにもれしゐし人の心
をこれもしき人にてとしばなりひ給ゆることく
四方の。（源詞）いかるまびしうしてなくいらうしけ遣。うしてこく
人になびかぬいと心づきなきわざなり。こゝがうら
くらぐしくすくよりなりぬ心なりひに。女もしこゝ

やまとうまてとりたげしてもしまあざむかれ
ぬべきがさすがにもれつゝこゝん人のころには
志るがりんなん衣にまてわが心のまくにとりなす縁
してこゝんになりかしくおぼゆべきなどのまへに
左を詞 ろのかるの仇このこゝにはまてもなれ給はざりけり
とおもひまふるにもくらおしく侮わざられとて
なくそ地れうちくもりて風ひやゝかなるに
添 いといたう打ながめこまひて
添 こし人のみふりを雲とながむれば夕の雲
もむつましさかれどひとりごちゐへど元さし
いらへも罕ぞやうまておはをましかげとせふ





地のいる此家のこぞ（まい）まりありあれどことはあ里
しやうなりことろそも志給ゑ○がうしとお
ぼしとてはけるぞ（夏蝶ハ）いとおしとせふまうくまげ
らひまふをきてさすがまうちなげきかり。
とそくらぶりなんとすりをさすがま心ぼそれ
だおぼします稱ぬりところこまうけ（文）ら雨
たりなやむをとまいでくいえこそ
（夏蝶）ともぬをもなどゆとそで程ふりまいら
ぶりかはせひこぶるく。おすぶしまとまなんと
きそしたりめづらしきまこれもあられますれ
給ばいけるひなきやらぶいはましごとまる

宣蟬の世ハうきものとしりなしと文云の
たまかつ命ちたらすしやと此てもうちわたのくり
なくまこぶれりきものへ多いとうけくしげなり粮
れもぬるを忘のりぬをいとおしうもおかしうも
ひかりやうにくらぐハきてくはをどけ
ぢくとはしらぐさすがまいふかひなりしずそ
こしなりてやこなんとしふなりかりれかうつ
かるハ蔵人のおねをなんりまた寸とこそのふ
あやしやいかましふんとおねのころのうち
もいとおしうまるかれ人の字文もゆしかれバ
小君にて志まりてしふこころハしりしまへつるや

といひつゝ寺
ほのゝまも行ばの荻とむすばぎハ露のかご
と我なまくかけまし。こゝやゝるゝおぎまつけて悪
びてとのゝまへ心どりあやまりて。おゐもこれ
てまれなりゝりとも心ひなくをばさりともつゝ持る
してんとも心ふ。此心をどりぞあいなりゝ。おゐ
のなまさおりまゝすれば心うしとも心へどうくおぼ
し出るもさすがまて。此ゝりくちとさぞうり
とかゞとまてどゝれ
ほのめ寺風まつけてもしるおぎのゝるばく
霜まむすばれつゝ。てはあしげなるとまゝぎうし。

ざれバ三てハいたるさ海志なりし。ほ(涼人)がげよそし
かかおぼし出るゝ。うちとけでむかひゐたる人ハ。
えうとこそ何まじきさ海も志たりしかれ。なまの
心ぢをありげもなく。さうどきほこりたりしよ
とおぼし出るゝ。にくゝ。ず。な(地)をこりずまゝ又も
ほゞ。ハたちぬべきさ(ミ)の心のすさひなりあり。ゞれ人(タ執)の
四十九日。悪びてひしの法花堂(ぶつけどう)にてごとそぐず。さ
うぞくよりたゞめて。さるべきもれどもこまかず
経(きやう)などをさせぬゝ。経(きやう)。仏(かとけ)のかざりまでをろかるゝず
雅光(えいこう)があまの阿閦梨(あざア)。いとこうとき人にてあるゝ
しかり。ゞれ。ゞれ師にてむつましくおぼせ。文章(もんじやう)

ぐらきめして。朝文（ぐりんもん）つくしをかふ。それ人となくて。
衣（あれ）とさひし人のまゝるさき海になりまゝるば。
あらぶ仏にゆづりしてまつるし。あくれげまゝ
さきおしまへれば。ぶぐ（特士詞）くるぶしくりふべさと侍ら
ざめりと申す。志（源）のびのへど。此なうぶもこぼれて。
いうじくおぼしたれば。なまんぐ（特士詞）なるん。それ人とハ
ゆれもなくてかうおぼしなげかすぐりなりけ
んすくをれたるさよといひけり。志（源）のびてをゐうぜ
させのへりけるさうぞくのくう海をとりよせのて
（源）なくくもはふハ我（ヨガ）ゆふ志るひもはいづれ乃
世にかさけてうるべさ。此（源ハ）祖（ヨガ）までハしぐよふるば。

いづれの道にさぶまりておもむくらんとおもほ
しやすつゝ。ゆんずをいと哀りしまふ。頭中将を
ミまふまもあいなくむまさはゞさてかれるぞしこ
のおひたり。有信さうせまほしけれど。ぞとまを
ぢてうち出給ひず。かれ夕がれのやどりまいづる
まとしひまどへど。それまくまえ。君を
ぶまをとづれ。ぶおやしとおもひたげさあり。
たしかなるねど。けくひとさぐりまやとさくめさ
しば。雅光をうしろかれど。いとうけたるれ氣色
なくいひなして。なをおるじごとすさありさかれ
ぞいとゞゆめれ心ちしてかしずるやうの子ども

のすきぐくちつきぐ頭の君はとちぎりてやゞてかそ
くぢりけるやとぞ思ひけり。これ家あるぞ。
ろしの京のめれうのむすめなりけり。三人その子は
ありて。かをはしく成ければ。思ひ出てくれ。みさまを
きうきぬなりけりとなさしひかり。かとりつ。う
しきりくいひさはげんを思ひて。君もいまさうよ
もしさじと思ひのへだゞげつぶされうへとぞつまえ
まさず。げうさまのしくゆく兵すくて色計。涼君いゆめる
ふるこそそやと思ひわつるきこれほうじ志給て
又の夜ほのよみれありし院なじおぼえひしり
女のき段も。おろすぞやうすてそしなれど。おれう

しところますそなんもれ。われまこいれ公へ
よりまうくなりぬりことくおぼしいづるまを。
ゆくしくなん。いまれすを。神無月のつゐちごろ
まくだり。女房のくだらんまとて。ふむけ心ことま
きさせのふ。まるうちくまもわざとしたまひて。
二度やうまおりしさ度なり。くし。あふぎ。おほく
して。ぬさなどわざとがましくて。かれこうち
きもつかる寸
源
あさまでのうたづりとしほどまひてす
袖のくちまけりか。地ものやうなることぐもあれど
うりさ々れバうゝ。ぬ。れつひかりまれど。ふ君

して、こうちゃされはれうりぢうりはさてさせたり
蝶のくもたちへてげる夜むかへすをこそも
ねはなかれかり。思へど。あやしう人にゝぬこころ
づよさまでもふりくなれぬるかとしひつゞけ事
かぜふぞ冬たり日なりけるもしるくうちしぐ
れて。空の氣色いと衣なりながめくしまひて
過ましもかふわるくもふる頃ほ明かる
しるぬ秋の暮れ。我かく人しれぬことをくるし
かりかりと。ちぼしきりぬしんかし。うやう乃
くぶくしきことをあるがちまうくろへしのび
給しもいとおしくて。これもしとぐ給ふる

69038
6AP78

とかどみんどの此こゝをすんかゝる。こゝん人さへかゝ
はなすぶ。もれはめがちなるとはくりことめさ
なるとりなす人もれし給なればなん。あまりもの
いひさゞなるさつこさりどころなく